妙　覚　寺　城　跡

―平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡―

２０１３年

古代文化調査会

妙　覚　寺　城　跡

―平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡―

２０１３年

古代文化調査会

例　言

1．本書は、古代文化調査会が京都市中京区新町通押小路下る中之町において、株式会社ダイマルヤによるマンション建設に伴い実施した平安京左京三条三坊七町・妙覚寺城跡・烏丸御池遺跡（11H471）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、株式会社ダイマルヤより委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。

3．調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。

4．本書の編集・執筆は家崎がおこなった。

5．図面及び遺物整理は山田学がおこない、遺物実測及び製図トレースは水谷明子が担当した。

6．本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。

7．本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の１の地図（三条大橋）、国土地理院発行の25,000分の１の地図（京都西南部）を調整し、使用した。

8．土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9．遺構番号は実測図・写真ともに共通している。

10．発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

家原圭太　宇野隆志　馬瀬智光　奥井智子　梶川敏夫　北田栄造　鈴木久史　西森正晃
長谷川行孝　堀　大輔　宮原健吾　村井伸也　八木匡夫　山本雅和
（株）明輝建設　（株）大高建設　（公財）京都市埋蔵文化財研究所　（株）ダイマルヤ
（株）東洋設計事務所

本　文　目　次

妙覚寺城跡・平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡

Ⅰ　調査の経過…… 1

Ⅱ　遺　　構…… 7

Ⅲ　遺　　物…… 17

Ⅳ　ま　と　め…… 34

図　版　目　次

図版１　遺跡　１　東半部第１面全景（北から）
　　２　東半部第２面全景（北から）
図版２　遺跡　１　東半部第３面全景（北から）
　　２　東半北部第４面（北から）
図版３　遺跡　１　堀116（北東から）
　　２　井戸166（南から）
図版４　遺跡　１　西半部第１面全景（北から）
　　２　西半部第２面全景（北から）
図版５　遺跡　１　西半部第３面全景（北から）
　　２　鋳造遺構198（南東から）
図版６　遺跡　１　堀116（南西から）
　　２　堀201土器出土状況（東から）
図版７　遺跡　１　調査地近景（北東から）
　　２　堀201北壁断面（南から）
　　３　堀116セクション断面（北東から）
　　４　堀127セクション断面（北から）
　　５　木枠遺構119（北西から）
　　６　井戸166木枠出土状況（南から）

7　土壙45（西から）
8　土壙55（南から）
図版８　遺跡　1　炉214（南から）
2　炉215（南から）
3　炉213（南から）
4　炉264（南から）
5　炉210～212（南東から）
6　井戸181（西から）
7　土壙392（南から）
8　土壙244（北から）
図版９　遺物　土壙438・井戸166・堀116・127・201・土壙244・429・井戸181出土遺物
図版10　遺物　土壙45・55・343・井戸20・土壙52・73出土遺物
図版11　遺物　土壙11・土壙93・柱穴280・井戸14・土壙219・115・13・298・343出土遺物
図版12　遺物　堀127・整地層③・土壙103・整地層②・土壙104・堀116出土遺物
図版13　遺物　井戸20・堀127・116出土遺物
図版14　遺物　柱穴272・整地層③・土壙58・343・井戸26出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図……1
図２　調査地位置図……2
図３　平安京条坊と調査地位置図……2
図４　四行八門と調査位置関係図……2
図５　北壁断面実測図……4
図６　東壁断面実測図……5
図７　西壁断面実測図……6
図８　第１・２面遺構実測図……8
図９　第３・４面遺構実測図……9
図10　堀116・127セクション断面実測図……11
図11　井戸181・166実測図……12
図12　土壙244・392・45・55実測図……14
図13　炉213～215・264実測図……15
図14　堀116出土遺物実測図……17

図15　土壙103・438・287・172出土遺物実測図……18
図16　井戸166出土遺物実測図 ……18
図17　土壙320出土遺物実測図 ……19
図18　土壙190出土遺物実測図 ……20
図19　堀116・木枠遺構119出土遺物実測図……21
図20　堀127出土遺物実測図 ……21
図21　土壙151出土遺物実測図 ……21
図22　堀201出土遺物実測図 ……22
図23　土壙244・117・429・237・343・260・井戸181・20・鋳造遺構198出土遺物実測図……23
図24　土壙45・55出土遺物実測図……24
図25　土壙52・73・11・93・柱穴280出土遺物実測図 ……25
図26　軒瓦拓影・実測図……28
図27　軒瓦拓影・実測図……29
図28　土製品実測図……30
図29　石製品実測図……31
図30　銭貨拓影図……32
図31　銭貨拓影図……33
図32　妙覚寺城域推定変遷図……35
図33　中古京師内外地図（左）と中昔京師地図抜粋……37

表　目　次

表１　出土銭貨一覧表……33

妙覚寺城跡・平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡

Ⅰ　調査の経過

調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区新町通押小路下る中之町46である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京左京三条三坊七町跡及び妙覚寺城跡・烏丸御池遺跡に当たる。2012年春、当地に株式会社ダイマルヤによるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下１ｍにおいて室町時代の堀跡が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の指導がなされた。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうことになった。調査は2013年４月より開始することとなった。

調査経過

当該地は、平安京跡の左京三条三坊七町に相当し、西が町尻小路、東が室町小路、北が押小路、南が三条坊門小路に囲まれたところで、調査対象地は町尻小路に西面する七町の南西部・西一行

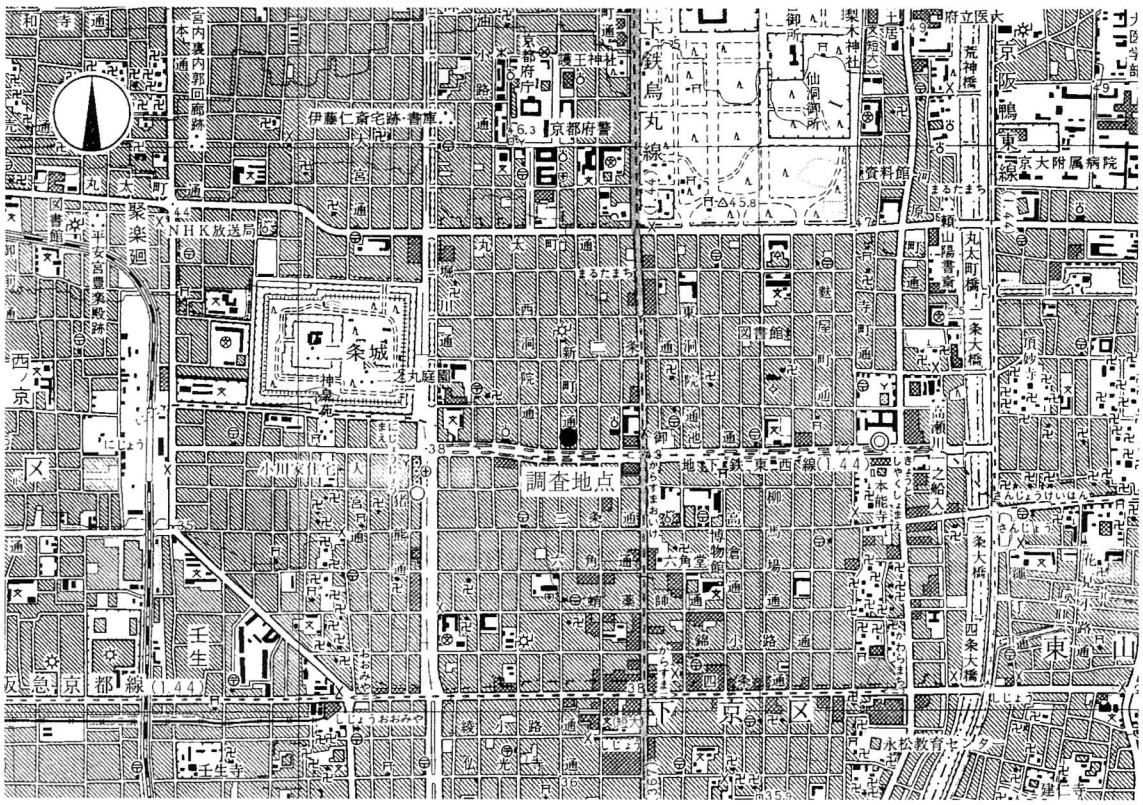


図１　調査地点位置図（1/25,000）

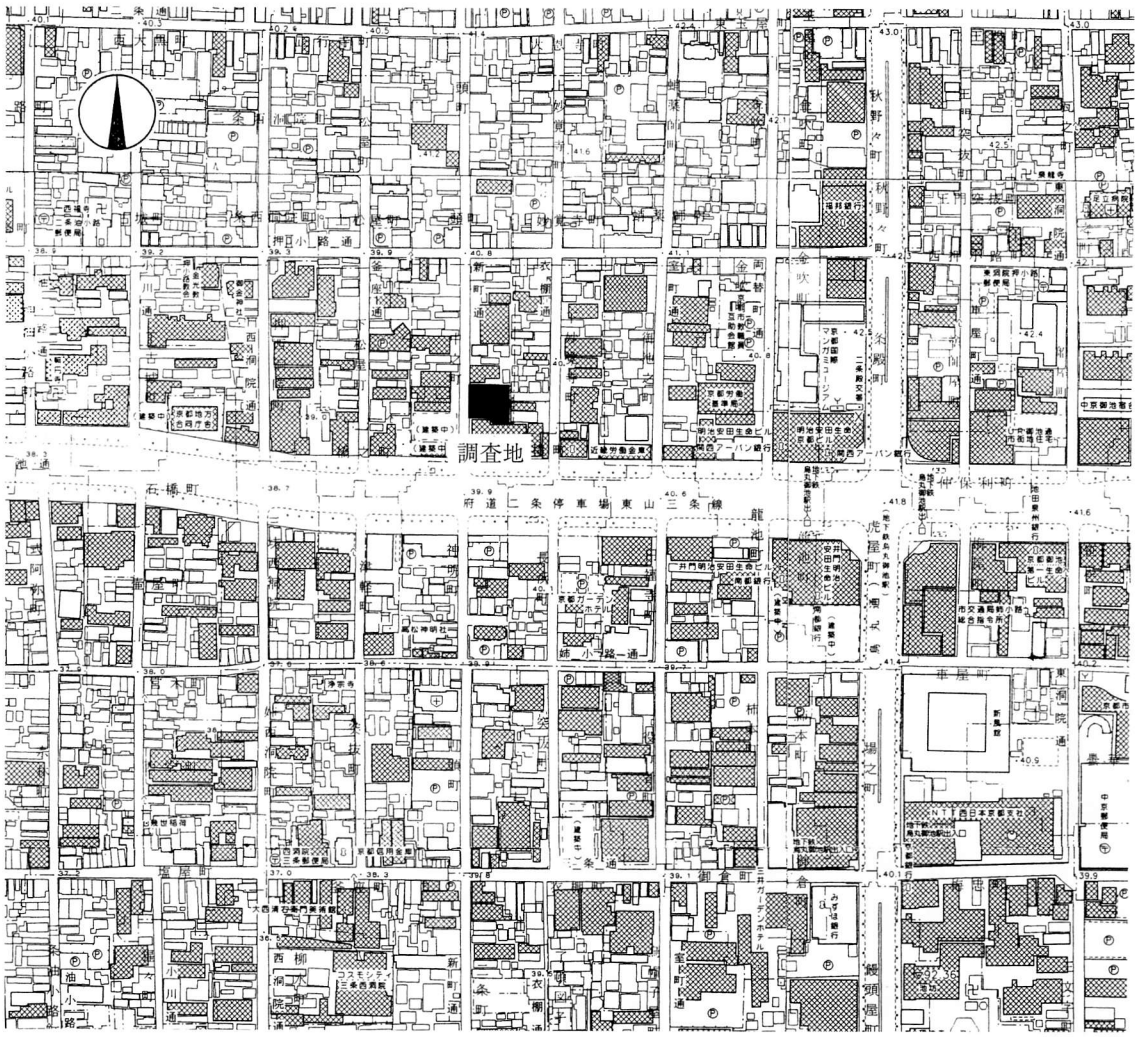


図２　調査地位置図（1/5,000）

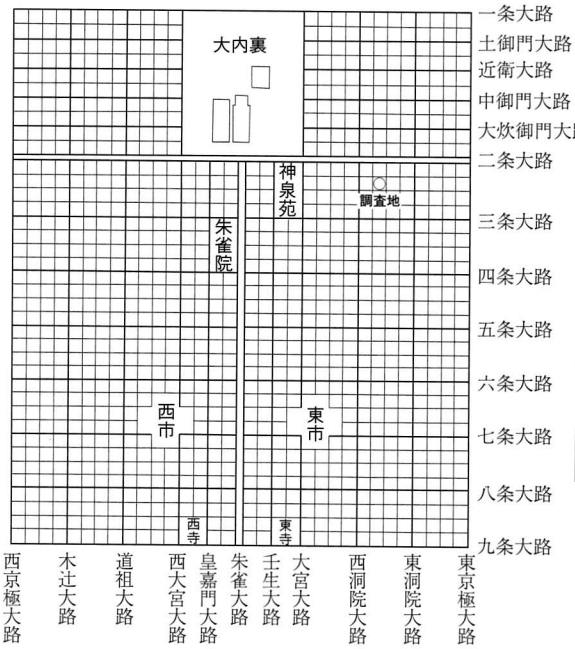


図３　平安京条坊と調査地位置図

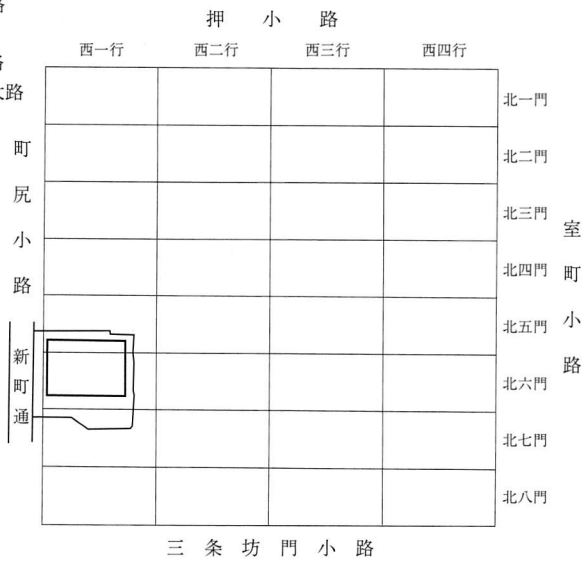


図４　四行八門と調査位置関係図（1/2,000）

北五～六門に相当する。文献資料からは、当町は平安時代に冷泉上皇の鴨院（鴨井殿）が置かれたところで、当初七町のみであったが後に八町を含め南北二町の広さを占めたとされている。この「鴨井」の名の由来は邸宅内の古井戸に鴨が常に群がっていたことに因む名といわれている。またこの地はその後、藤原経通、藤原師実、後朱雀天皇の皇后陽明門院、藤原忠実などに引き継がれていったことが記録として残っている。

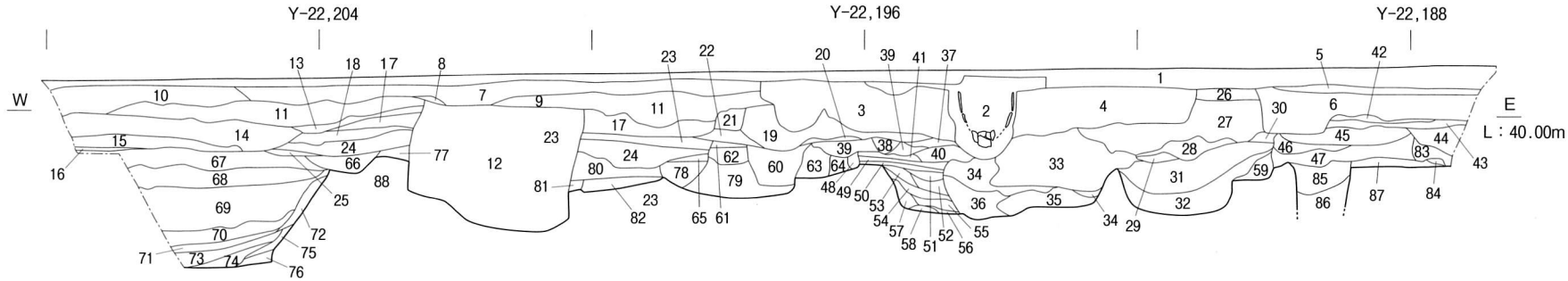
室町時代後期においては法華宗二十一ヵ寺のひとつ妙覚寺が置かれたところである。妙覚寺は永和４年（1378）妙顕寺の後継者問題で離れた日実上人が四条大宮の地に創建し、文明15年（1483）足利義尚の命により当地に移転した経緯をもつ。当時の日蓮宗の寺院はすべて堀を穿ち、土塁と塀を巡らし城砦化していたとされている。上杉家伝来の狩野永徳筆「洛中洛外図屏風」には妙覚寺を囲む堀が描かれている。天文５年（1536）の天文法華の乱で焼失したものの、６年後にはまた当地に再建され、その後織田信長が入洛の折りには常宿所としたところでもある。天正10年（1582）の本能寺の変とともに焼失し、翌年秀吉の命により上京へ移転し、現在に至る。[註1]

調査にあたっては、西側に隣接する二町の調査[註2]で検出した北東から南西方向の堀が、今回の調査地の方向に当たるため、その検出に留意した。また試掘調査において町尻通り沿いに南北方向の大溝を検出しており、二町の堀との関係性にも注意を払った。

実際の調査においては、場内に土置き場を確保するため反転方式で調査をおこなうこととし、調査対象地を東半部と西半部に２分割し、東半部より2013年４月18日から調査を開始した。東半部の調査は５月23日に完了し、直ちに埋め戻して西半部の調査に着手した。西半部の調査は2013年６月28日に終了した。調査面積は315㎡、実働日数は53日間であった。

調査の方法としては、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（X=－109,636m、Y=－22,184m）とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、４ｍメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。七町における築地四隅の座標値（新測地系）は次のとおりである。

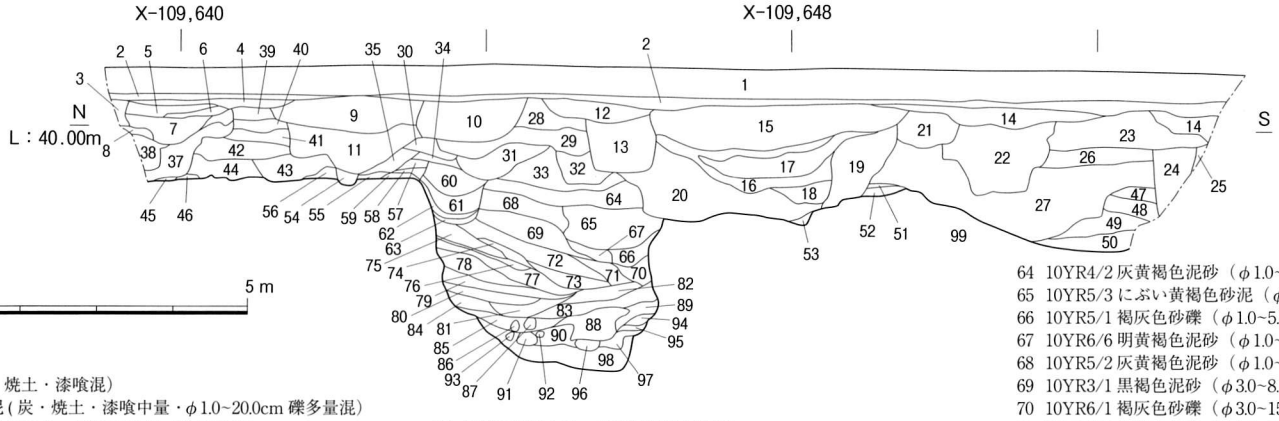
北西	X=－109,567.40m	北東	X=－109,566.91m
	Y=－ 22,208.48m		Y=－ 22,089.09m
南西	X=－109,686.79m	南東	X=－109,686.30m
	Y=－ 22,207.99m		Y=－ 22,088.61m



1 盛土及び撹乱
2 10YR3/2 黒褐色砂泥（漆喰・焼土・φ1.0~15.0cm 礫混）
3 上層 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (瓦・漆喰・焼土多量・φ1.0~10.0cm 礫多量混）
3 下層 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~4.0cm 礫混）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土中量・粘土ブロック・漆喰ブロック多量・φ1.0~15.0cm 礫中量混）
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
6 10YR4/4 褐色砂泥（炭・焼土中量・細砂～粗砂・φ1.0~15.0cm 礫多量混）
7 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭中量・焼土・瓦少量・漆喰・φ1.0~10.0cm 礫中量混）
8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土・漆喰少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
9 10YR3/2 黒褐色砂泥（焼土・炭少量・φ1.0~3.0cm 礫多量混）
10 10YR2/3 黒褐色砂泥（漆喰・焼土ブロック・φ1.0~30.0cm 礫少量混）
11 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土中量・漆喰・粗砂・φ1.0~10.0cm 礫混）
12 5YR3/6 暗赤褐色焼土（炭中量・瓦・漆喰多量混）
13 10YR3/1 黒褐色砂泥（炭・焼土多量・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
14 5YR3/6 暗赤褐色焼土＋7.5YR1.7/1 黒色炭下層に溜まる
15 10YR3/1 黒褐色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
17 10YR3/1 黒褐色砂泥＋10YR4/4 褐色砂礫（炭少量・φ1.0~10.0cm 礫多量に詰まる）
18 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土微量混）
19 10YR3/1 黒褐色砂泥（やや粘質・炭が下層に多量に溜まる・焼土中量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
20 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭少量・焼土多量混）
21 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・漆喰少量・微砂・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
22 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土混）
23 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・土師器・貝・瓦少量混）
24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
25 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・貝混）
26 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土少量・漆喰・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
27 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
28 10YR2/2 黒褐色炭（φ1.0~4.0cm 礫少量混）
29 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土中量・φ1.0~3.0cm 礫極少量混）
30 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土
31 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（粗砂・φ0.5 ～ 10.0cm 礫多量混）
32 10YR1.7/1 黒色炭
土壙 11
33 7.5YR3/4 暗褐色砂泥（焼土多量・φ1.0~10.0cm 礫中量混）
34 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭中量・φ0.5~5.0cm 礫中量混）
35 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（焼土ブロック多量混）
36 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭多量・φ1.0~6.0cm 礫少量混）
37 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~3.0cm 礫極少量混）
38 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭・φ1.0~4.0cm 礫極少量混）
39 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・φ1.0~2.0cm 礫極少量混）
40 2.5Y7/6 明黄褐色シルト～泥土（炭・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
41 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
42 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
43 2.5Y2/1 黒色砂泥（炭多量混）
44 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~5.0cm 礫中量混）
45 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土多量・φ1.0~8.0cm 礫少量混）
46 10YR4/4 褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~10.0cm 礫少量混）
47 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
48 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭少量・φ1.0~3.0cm 礫極少量混）
49 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭少量・φ1.0~4.0cm 礫中量混）
50 10YR4/4 褐色砂泥（炭・φ1.0~2.0cm 礫少量混）
51 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（φ1.0~8.0cm 礫多量混）
52 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
53 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭少量・φ0.5~3.0cm 礫多量混）
54 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・φ2.0~4.0cm 礫少量混）
55 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・φ2.0~4.0cm 礫少量混）
56 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・φ4.0~8.0cm 礫少量混）
57 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・φ1.0~2.0cm 礫極少量混）
58 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭・φ1.0~6.0cm 礫少量混）
堀 127
59 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
60 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・焼土混）
61 10YR3/2 黒褐色泥砂（炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
62 10YR4/2 灰黄褐色泥砂（炭・φ1.0~10.0cm 礫少量混）
63 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 (炭・φ1.0~10.0cm 礫少量混）
64 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・堅く締まる）
65 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭混）
66 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（やや粘質・炭混）
67 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫少量混）（土壙 237）
68 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
69 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
70 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫中量混）
71 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫少量混）＋2.5Y5/4 黄褐色シルトがブロック状に混る
72 10YR3/3 暗褐色砂泥（やや粘質）
73 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（炭・φ1.0~10.0cm 礫少量混）
74 2.5Y4/1 黄灰色粘質土＋10YR4/4 褐色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫少量混）
75 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
76 10YR4/4 褐色粗砂（φ1.0~3.0cm 礫少量混）
堀 201
77 10YR3/3 暗褐色砂泥（やや締まる・炭混）
78 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
79 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
80 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（炭・φ1.0~15.0cm 礫中量混）
81 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（やや粘質・炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
82 2.5Y3/1 黒褐色砂泥（やや粘質・炭混）
83 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭多量混）
84 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・φ1.0~2.0cm 礫少量混）
85 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（φ0.5~5.0cm 礫多量混）
86 10YR3/3 暗褐色砂泥（φ1.0~4.0cm 礫中量混）
87 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂～シルト（炭・φ1.0~2.0cm 礫少量混）
88 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫（ベース）

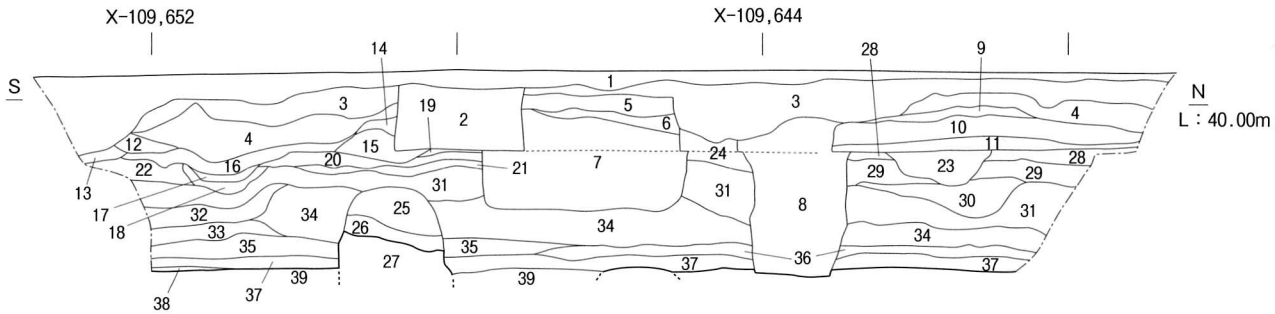
0　5 m

図 5　北壁断面実測図（1/100）



1 盛土及び撹乱
2 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・漆喰混）
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (炭・焼土・漆喰中量・φ1.0~20.0cm 礫多量混）
4 2.5Y2/1 黒色砂泥＋2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭多量混）
5 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・漆喰少量混）
6 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土少量混）
7 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土中量・φ1.0~10.0cm 礫中量混）
8 2.5Y2/1 黒色砂泥（炭多量混）
9 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土中量・瓦少量混）
10 10YR4/2 灰黄褐色砂礫（10YR3/2 黒褐色砂泥ブロック・φ1.0~10.0cm 礫多量混）
11 10YR2/3 黒褐色砂泥（10YR5/6 黄褐色粘質土・炭中量・φ1.0~15.0cm 礫少量混）
12 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・焼土・漆喰・φ0.5~20.0cm 礫混）
13 2.5Y5/4 黄褐色砂礫（礫と砂礫の互層・φ0.5~10.0cm 礫多量混）
14 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（炭・焼土・φ0.5~15.0cm 礫混）
15 10YR3/4 暗褐色砂泥（炭・焼土・瓦・漆喰・φ0.5~20.0cm 礫混）
16 10YR1.7/1 黒色砂泥（炭・焼土多量混）
17 7.5YR3/3 暗褐色砂泥（焼土多量・φ0.5~3.0cm 礫少量混）
18 10YR2/1 黒色砂泥（焼瓦・焼壁土多量混）
19 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭)・焼土・φ0.5~3.0cm 礫混）
20 2.5Y5/4 黄褐色泥砂（炭多量・焼土混）（土壙 66）
21 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・漆喰・塩ビ管・φ0.5~2.0cm 礫混）
22 2.5Y5/4 黄褐色砂礫（φ0.5~1.0cm 礫多量混）
23 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~10.0cm 礫少量混）
24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土・φ0.5~20.0cm 礫多量混）
25 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・φ0.5~5.0cm 礫少量混）
26 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭・焼土・φ0.5~5.0cm 礫少量混）
27 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土・φ0.5~10.0cm 礫混）（土壙 58）
28 10YR4/4 褐色砂泥（炭・焼土・φ0.5~3.0cm 礫混）
29 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・焼土少量・漆喰・φ1.0~20.0cm 礫少量混）
30 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭混）
31 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・石灰少量混）
32 2.5Y2/1 黒色砂泥（炭・焼土・φ0.5~3.0cm 礫混）
33 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土・φ0.5~5.0cm 礫混）
34 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭混）
35 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
36 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
37 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭多量混）
38 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土中量・φ1.0~5.0cm 礫中量混）
39 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土少量混）
40 10YR3/4 暗褐色砂泥（炭少量・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
41 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭混）
42 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭混）
43 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土少量混）
44 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭混）
45 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
46 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
47 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（炭・焼土・φ0.5~10.0cm 礫少量混）（土壙 57）
48 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥（炭・焼土・φ0.5~3.0cm 礫混）
49 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（φ0.5~10.0cm 礫多量混）
50 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫（土壙 105）
51 10YR4/4 褐色砂泥（炭混）
52 10YR5/1 褐灰色砂泥（炭・焼土・φ1.0~5.0cm 礫混）
土壙 103
53 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥（φ0.5~3.0cm 礫混）
54 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
55 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭混）
56 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
57 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭混）
58 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（炭混）
59 2.5Y5/4 黄褐色砂泥
60 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（炭混）（土壙 93）
61 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
62 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
63 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭混）
土壙 93
64 10YR4/2 灰黄褐色泥砂（φ1.0~2.0cm 礫混）
65 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫混）
66 10YR5/1 褐灰色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫混）
67 10YR6/6 明黄褐色泥砂（φ1.0~5.0cm 礫混）
68 10YR5/2 灰黄褐色泥砂（φ1.0~2.0cm 礫混）
69 10YR3/1 黒褐色泥砂（φ3.0~8.0cm 礫混）
70 10YR6/1 褐灰色砂礫（φ3.0~15.0cm 礫混）
71 10YR3/2 黒褐色泥砂（φ1.0~5.0cm 礫混）
72 10YR4/1 褐灰色泥砂（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
73 10YR4/2 灰黄褐色泥砂（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
74 10YR5/2 灰黄褐色泥砂（φ1.0~2.0cm 礫混）
75 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（φ1.0~3.0cm 礫混）
76 10YR6/6 明黄褐色泥砂
77 10YR4/1 褐灰色砂礫（φ2.0~4.0cm 礫混）
78 10YR2/1 黒色砂泥
79 10YR3/1 黒褐色泥砂（φ1.0~3.0cm 黄色ブロック混）
80 10YR3/2 黒褐色泥砂（φ1.0~3.0cm 礫混）
81 2.5Y6/6 明黄褐色砂礫 (泥土・φ1.0~5.0cm 礫混）
82 10YR4/1 褐灰色泥砂（10YR5/6 黄褐色泥砂ブロック混）
83 10YR5/2 灰黄褐色泥砂（φ1.0~3.0cm 礫混）
84 10YR6/6 明黄褐色泥砂（φ1.0~3.0cm 礫混）
85 10YR3/1 黒褐色泥砂（小礫混）
86 2.5Y6/2 灰黄色泥土（砂混）
87 2.5Y3/1 黒褐色泥砂
88 10YR2/1 黒色砂泥（炭多量混）
89 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（シルト質）
90 10YR4/1 褐灰色泥砂（φ1.0~2.0cm 礫混・鉄分沈着）
91 2.5Y6/2 灰黄色泥土（砂混）
92 2.5Y6/2 灰黄色泥土
93 2.5Y6/2 灰黄色泥土
94 10YR4/1 褐灰色砂礫（φ1.0~4.0cm 礫混）
95 10YR5/1 褐灰色泥砂（小礫混）
96 2.5Y6/6 明黄褐色泥土（砂混）
97 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂（φ1.0~3.0cm 礫混）
98 10YR6/8 明黄褐色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫混）
99 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫（ベース）
堀 116

図 6　東壁断面実測図（1/100）



1 盛土及び撹乱
2 10YR3/2 黒褐色砂泥（漆喰・煉瓦・コンクリート片・炭多量混）
3 10YR2/3 黒褐色砂泥（漆喰・焼土ブロック・φ1.0~30.0cm 礫少量混）
4 5YR3/6 暗赤褐色焼土＋7.5YR1.7/1 黒色炭下層に溜まる
5 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土多量・漆喰中量・φ1.0~5.0cm 礫多量混）
6 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土多量・φ1.0~5.0cm 礫混）
7 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~5.0cm 礫混）
8 5YR3/6 暗赤褐色焼土（炭・瓦多量混）＋10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土中量混）（試掘溝）
9 10YR2/1 黒色砂泥＋10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（φ1.0~20.0cm 礫混）
10 10YR3/1 黒褐色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~5.0cm 礫混）
12 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土・φ2.0~20.0cm 礫混）
13 10YR3/2 黒褐色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
14 10YR1.7/1 黒色砂泥（φ5.0~10.0cm 礫多量混）
15 10YR3/2 黒褐色砂礫（φ1.0~10.0cm 礫多量混）
16 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~3.0cm 礫混）
17 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~10.0cm 礫混）
18 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
19 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫中量混）
20 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭・焼土混）＋10YR3/4 暗褐色砂泥（やや粘質）ブロック混
21 2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂（炭・φ1.0~3.0cm 礫混）
22 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~3.0cm 礫少量混）
23 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・φ1.0~5.0cm 礫少量混）
24 10YR3/3 暗褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~15.0cm 礫混）＋2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥ブロック混
25 10YR3/2 黒褐色泥砂（焼土・φ1.0~10.0cm 礫中量混）
26 10YR3/2 黒褐色泥砂（炭・焼土多量・φ1.0~5.0cm 礫混）　井戸 242
27 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土中量・φ1.0~15.0cm 礫混）
28 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫混）
29 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（炭・φ1.0~5.0cm 礫混）
30 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（炭・φ1.0~3.0cm 礫混）
31 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土・φ1.0~5.0cm 礫混）
32 10YR3/2 黒褐色泥砂（φ1.0~10.0cm 礫中量混）
33 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（φ1.0~5.0cm 礫中量混）　堀 201
34 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（φ1.0~10.0cm 礫中量混）
35 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（φ1.0~10.0cm 礫中量混）
36 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫混）
37 2.5Y4/1 黄灰色泥土（炭・φ1.0~10.0cm 礫混）
38 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥土
39 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫（φ1.0~10.0cm 礫多量混）（ベース）

0　5 m

図 7　西壁断面実測図（1/100）

Ⅱ 遺　構

調査地は盛土が厚さ0.2～0.4m程あり、その下は江戸時代の土層が地表下1.0～1.2mの厚さで堆積する。敷地全体は東端と西端では0.2m程高くなっているが、遺構面はほぼ平坦である。江戸時代の下層には室町時代後期から桃山時代の整地層が0.1～0.2m程の厚さで堆積し、以下はベースとなるが、西半部中央部付近には室町時代後期の整地層の下に平安時代中期の整地層が0.1m程の厚さで残存する。この平安時代中期の整地層（オリーブ褐色砂泥層）は細かな土師器片を多く含み、きわめて均質な土層である。東半、西半各３面の調査をおこない、東半部は第４面として井戸跡などの調査をおこなった。

遺構には平安時代から江戸時代のものがあり、遺構の種類としては、平安時代の土壙、掘立柱跡、鎌倉から室町時代の土壙、掘立柱、井戸、溝跡、桃山時代から江戸時代の土壙、掘立柱、井戸、溝、埋桶遺構、鋳造遺構跡などがある。それらの内大半が室町後期から桃山時代のものである。遺構総数は442基であった。以下主要な遺構について述べる。

平安時代

掘立柱群（図９・図版５の１）

調査区西半部の中央付近（５Ｃ区）で平安時代中期の掘立柱群を検出した。これらの柱群はベース面上で成立する。柱跡は径0.2～0.4m、深さ0.2m程の掘形をもち、柱根跡は0.15～0.2mを測り、いずれも小規模なものである。柱跡からは平安中期の土師器皿細片が出土している。

土壙103（図８・図版１の２）

調査区東南部の東壁沿いに位置する。東西長0.6m以上、南北長0.9m以上、深さ0.1mを測る。西側を除き他の各掘形は不明である。埋土の黄灰色（2.5Y4/1）砂泥層には11世紀代の土器、軒丸瓦を包含する。

土壙438（図９・図版５の１）

調査区西半部南寄りに位置する。東西長0.55m、南北長0.6mの楕円形に近い掘形をもち、深さ0.25mを測る。埋土は灰黄褐色砂泥（10YR4/2）である。完形の土師器皿を含む11世紀代の遺物を包含する。

土壙287（図８・図版４の２）

調査区西半部北寄りに位置する。南北長1.5m、東西長0.5m以上、深さ0.15mを測る。土師器皿が多量に堆積し土器溜り状を呈する。埋土は炭混りの褐灰色（10YR4/1）砂泥層で、土師器皿は12世紀代のものである。

土壙172（図９・図版２の２）

調査区東半部北壁近くに位置する。室町時代後期の堀127に西半部が削平を受けている。南北長1.7m以上、東西長0.55m以上、深さ0.6m程を測る。12世紀代の遺物を含む。

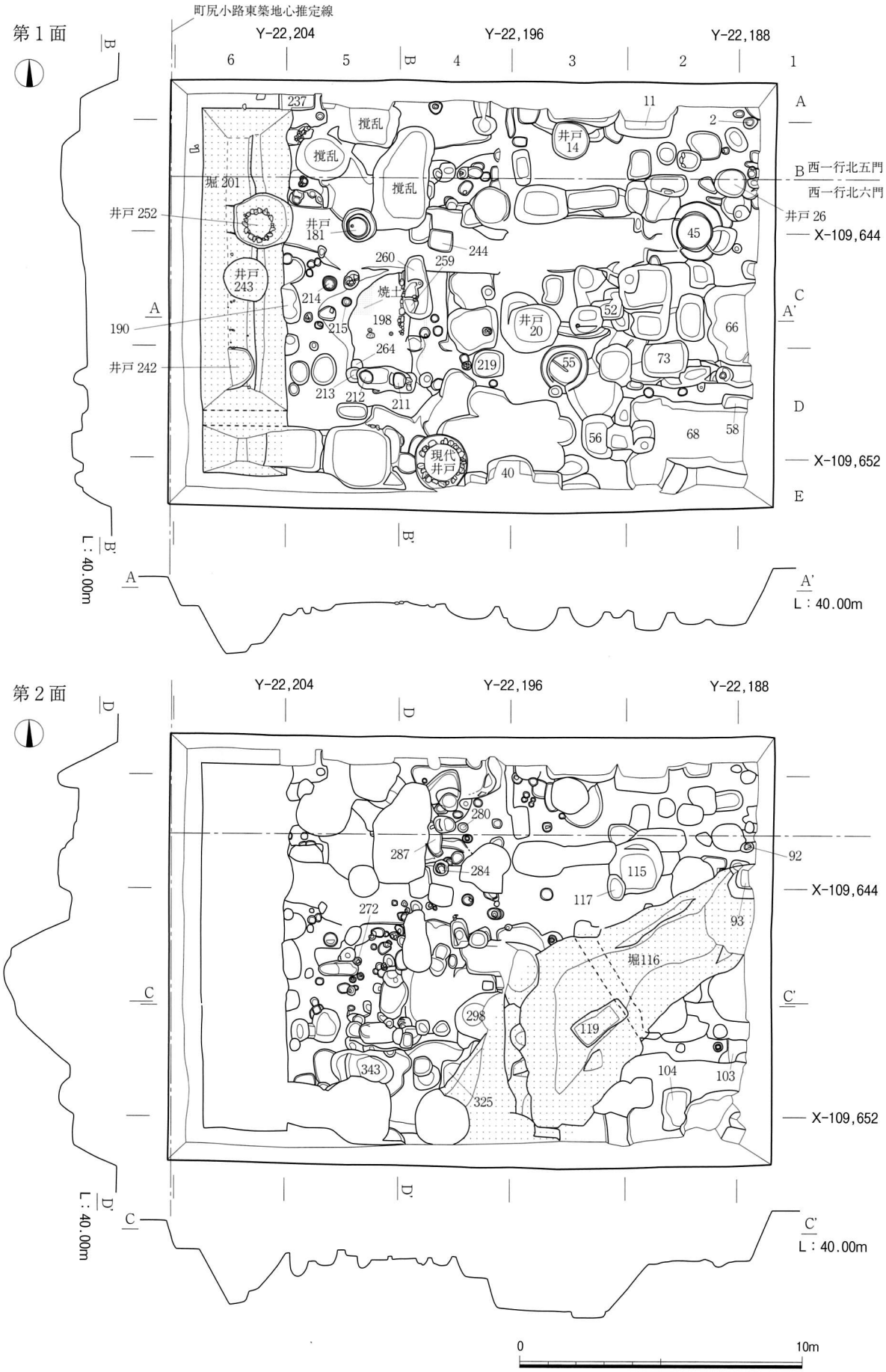


図8　第1・2面遺構実測図（1/200）

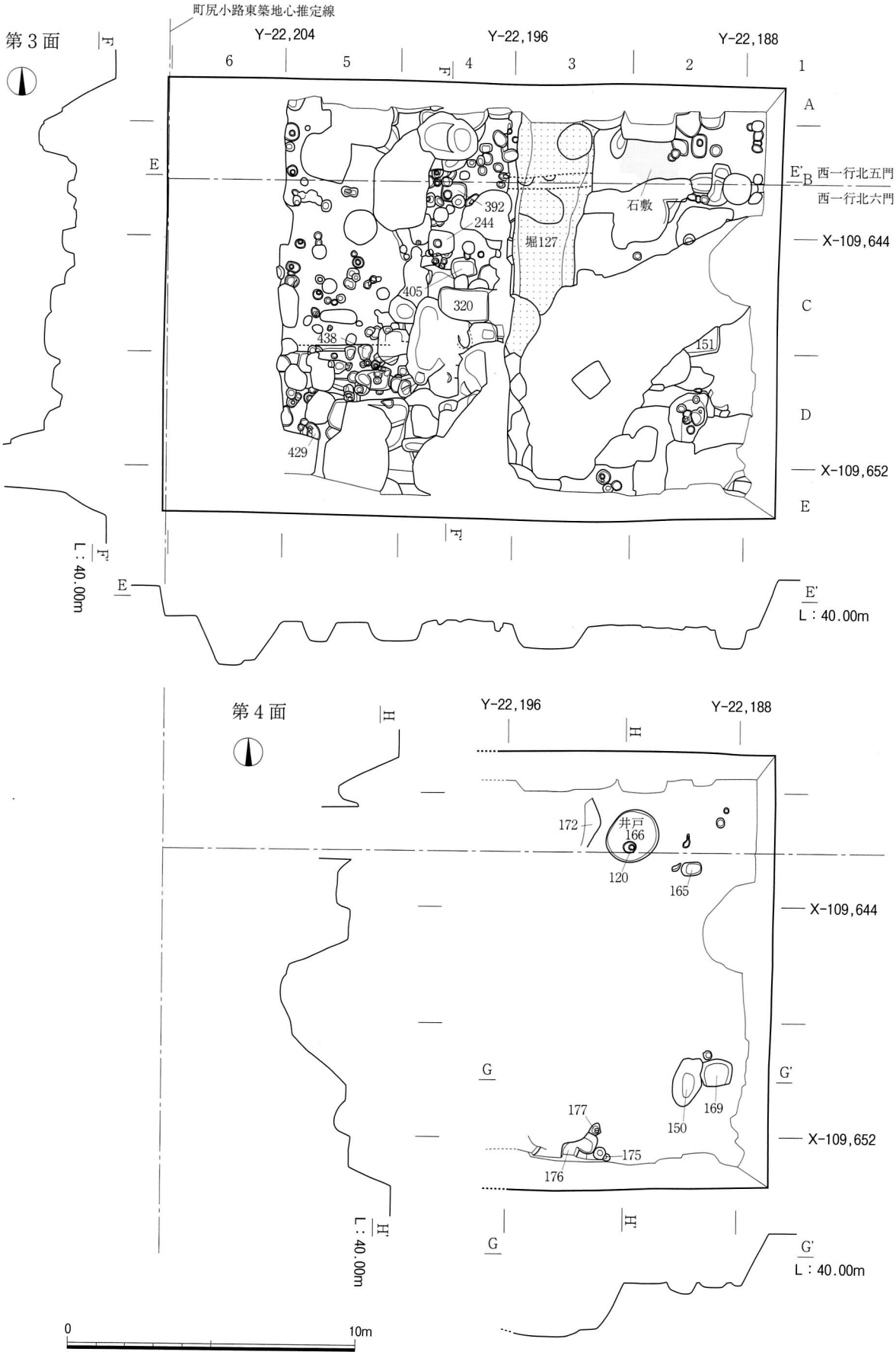


図9　第3・4面遺構実測図（1/200）

鎌倉から室町時代

鎌倉時代に属する遺構は掘立柱跡を数基数えるに過ぎない、出土遺物もきわめて少ないのが特徴である。

井戸166（図９・11・図版２の２・３の２・７の６）

調査区東半部北寄りに位置する。堀127の東肩部付近に広がる石敷き面を除去したベース上面で検出した。石組井戸である。掘形は径1.8mのやや歪んだ円形を呈し、深さ2.5mを測る。井筒は0.1～0.3mの川原石を円形に積み、内径は上部で1.2m、下部で0.9mを測り、井戸底に方形の木枠を上下三段に据える。木枠は上から一辺0.7m、高さ0.3m、一辺0.6m、高さ0.13m、最下段が一辺0.55m、高さ0.33mを測る。石組の南東上部４分の１程は石組が抜けており、代わりに粘土で補填する。井戸底の標高は36.5mを測る。木枠内より15世紀後半の遺物が出土。

土壙320（図９・図版５の１）

調査区中央部に位置する。東西長1.7m、南北長1.2mの方形を呈し、深さ0.6mを測る。掘形はほぼ直に落ち、底部は平坦である。掘形内に木枠などは認められなく、骨などの痕跡も検出できなかったが、鉄釘が５点、銅銭が４点程出土しており、銅銭の１枚は「大観通寶」である。埋土の灰黄褐色（10YR4/2）泥砂層から瓦器羽釜などの遺物が多く出土した。木棺墓の可能性がある。

柱穴284（図８・図版４の２）

調査区中央北寄りに位置する。径0.55m、深さ0.2mの掘立柱跡で、掘形の底に根石を据える。掘形内より銅銭６枚が緡銭の状態で出土した。銭は二枚ずつ背合わせにする。地鎮に伴う埋納銭と考えられる。

土壙190（図８・図版４の１）

調査区西半部中央に位置する。堀201によって西半部が削平を受けている。南北長1.4m、東西長0.6m以上、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色（10YR3/2）砂泥層である。

土壙151（図９・図版２の１）

調査区東端部の中央に位置する。堀116と切り合い関係にある。東西長1.25m以上、南北長1.0m以上、深さ0.4mを測り、方形の掘形をもつ。埋土はオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂泥層である。

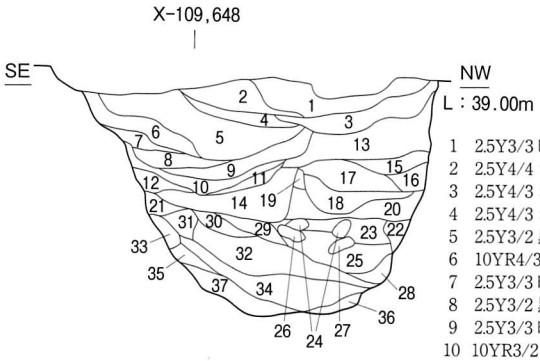
堀127（図９・10・図版２の１・７の４）

調査区中央部に位置する。南北方向の素堀の堀である。幅2.15～2.65m、深さ0.8mの規模をもち、逆台形状の掘形をもつ。堆積土は礫の混入度によって３層程に大きく分層できるが、いずれも廃絶時の埋土である。堀底にはシルト層はほとんど認められなかった。当地における妙覚寺創建時の西を限る堀とみられる。

堀116（図８・10・図版１の２・３の１・６の１・７の３と５）

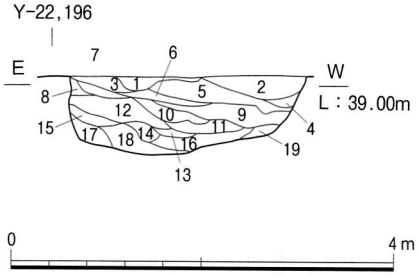
調査区東部から南部に位置する。北東から南西にやや円を描くように掘られた斜行堀である。幅3.0～4.5m、深さ1.9～2.8mの規模をもち、掘形はU字形を呈する。壁面は垂直に近く一部は

堀116



1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭混）
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
5 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭混）
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭混）
7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（φ1.0~10.0cm 礫多量混）
9 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土混）
10 10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土混）
11 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭・焼土混）
12 10YR3/3 暗褐色泥砂
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（炭混）
14 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭混)
15 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
+2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土（炭混）
16 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭・土師器混）
17 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭混）
18 10YR2/3 黒褐色砂礫（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
19 10YR3/2 黒褐色砂泥
20 10YR2/3 黒褐色砂礫（φ1.0~10.0cm 礫混）
21 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
22 10YR3/2 黒褐色砂礫（φ1.0~15.0cm 礫混）
23 10YR3/2 黒褐色砂泥
24 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（炭混）
25 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥（炭混）
26 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
27 2.5Y2/1 黒色砂泥（炭混）
28 10YR3/2 黒褐色砂泥
29 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
+10YR3/4 暗褐色砂泥
30 10YR4/2 灰黄褐色泥砂
31 10YR3/2 黒褐色砂泥
32 10YR3/3 暗褐色砂泥
（φ1.0~3.0cm 礫多量混）
33 10YR3/2 黒褐色砂泥
34 10YR3/2 黒褐色砂礫
35 10YR3/3 暗褐色砂泥
36 10YR3/2 黒褐色砂礫
37 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫

堀127



1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（φ1.0~4.0cm 礫混）
2 10YR3/2 黒褐色砂泥（φ0.5~5.0cm 礫混）
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
4 2.5Y5/4 黄褐色砂泥（φ1.0~10.0cm 礫混）
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（φ1.0~6.0cm 礫混）
6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
7 2.5Y5/4 黄褐色砂泥（φ0.5~3.0cm 礫混）
8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（φ1.0~4.0cm 礫混）
9 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫中量混）
10 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫混）
11 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（φ0.5~4.0cm 礫多量に詰まる）
12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（φ0.5~6.0cm 礫多量混）
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（φ0.5~3.0cm 礫混）
14 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（φ0.5~5.0cm 礫多量混）
15 10YR3/3 暗褐色砂泥（φ0.5~4.0cm 礫混）
16 10YR3/2 黒褐色砂泥（φ1.0~5.0cm 礫多量混）
17 10YR3/2 黒褐色砂泥（φ1.0~3.0cm 礫混）
18 10YR3/2 黒褐色砂泥（φ1.0~10.0cm 礫混）
19 10YR4/2 灰黄褐色砂泥（φ0.5~3.0cm 礫混）

図10　堀116・127セクション断面実測図（1/80）

崩落してえぐれた状態が認められる。堀底から１m程は礫が多量に流れ込んだ堆積を示す。この堀に設定した中央セクション西側の堀底に木枠を据えた遺構119が存在する。幅0.9m、長さ2.0m、高さ0.1mの方形の板を据える。底部に板はない。遺構の性格は不明であるが、堀に伴う施設であろう。堀116は堀127を斜行して横断し、2009年度に西隣の二町の調査において検出した堀32と繋がるものとみられる。

堀201（図８・図版４の１・６の２・７の２）

調査区西端部に位置する。南北方向の堀である。西肩部は調査区外となる。西肩部を確認するため拡張したが、西肩部は検出できず、幅6.0m以上であることが判明した。深さは1.7mを測り、掘形は逆台形状を呈する。堀底は厚さ0.2mの黄灰色（2.5Y4/1）のシルト層が堆積し、水堀であることを示す。シルト層より完存品の土師器皿などが多数出土した。天文法華の乱で焼け落ちた妙覚寺の再建に伴う堀跡とみられる。

桃山から江戸時代

土壙244・392（図８・９・図版４の１・５の１・８の７と８）

調査区中央部北西寄りに位置する。土壙244は東西長0.9m、南北長0.8mの方形を呈し、深さ0.4mを測る。土壙392は東西長0.9m、南北長0.75mの方形を呈し、深さは0.35mを測り、土壙244と同規模を呈する。２基の土壙からは人骨の残欠が出土した。頭蓋骨や大腿骨とみられる痕跡がわずかに認められ、頭囲を北にして西向きに屈葬している状況がうかがえる。木棺等の施設はなく、直葬とみられる。出土遺物はほとんど無く、土壙244の掘形の南壁に土師器皿の完存品が１点へばりついた状態で出土しただけで、他の副葬品などは出土しなかった。この土師器皿は16世紀後半のものである。なお、土壙244の南東部に隣接する土壙405の掘形内からは11世紀代の土器類のみが出土したが、同じような規模の方形を呈し、墓の可能性がある。

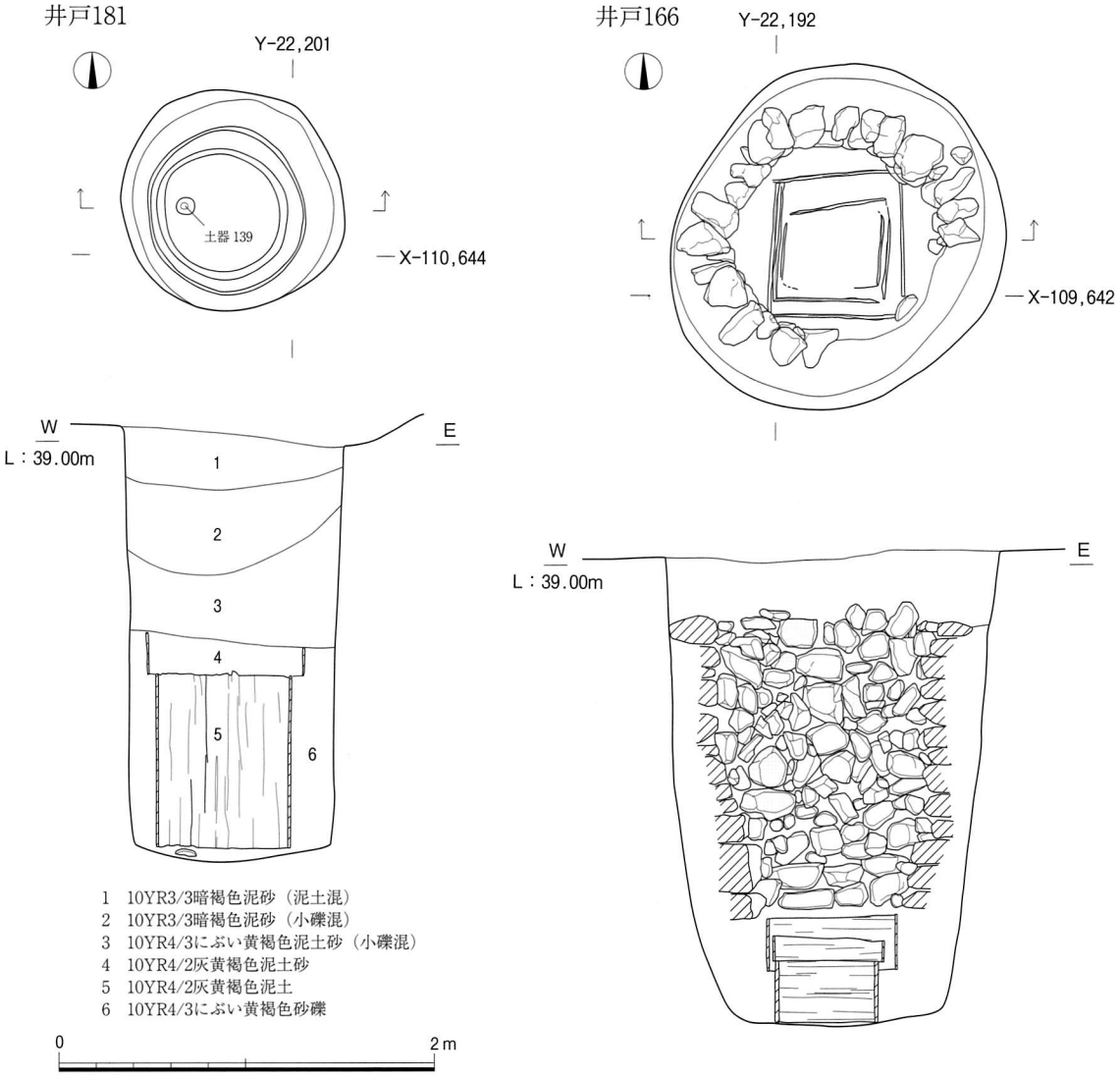


図11　井戸181・166実測図（1/40）

土壙117（図８・図版１の２）

調査区中央部北東寄りに位置する。南北長0.9m、東西長0.63mの楕円形を呈し、深さ0.5mを測る。埋土のオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂泥層からは良好な状態の土師器皿が出土した。

土壙429（図９・図版５の１）

調査区南西部に位置する。南北長0.55m、東西長0.45m、深さ0.15mを測る。埋土のにぶい黄色（2.5Y6/3）砂泥層から土師器皿２点が完形で出土した。16世紀後半。

井戸181（図８・11・図版４の１・８の６）

調査区中央北西部寄りに位置する。円形縦板組井戸である。径1.2mの掘形をもち、深さ2.35mを測る。井筒として円形に縦板を上下二段に組む。上段の縦板の径0.85mで、残存高0.24m、下段の縦板は径0.72m、高さ0.84m程を測る。木枠内は灰黄褐色（10YR4/2）泥土層である。井戸底から完存品の瀬戸皿が１点出土した。井戸底の標高は36.75mを測る。16世紀末から17世紀前半。

井戸20（図８・図版１の１）

調査区中央部に位置する。径1.8m程の円形の掘形をもち、深さ1.8m以上ある。掘形内は井筒との土層の相違が認められず、石組などが抜き取られた可能性がある。唐津皿などともに二次焼成を受けた茶入れの完存品などが出土している。

土壙237（図８）

調査区北西部の北壁沿いに位置する。堀201の東肩部を掘り込んで成立する。東西長1.3m、南北長0.55m以上の方形の掘形をもち、深さ0.3mを測る。

鋳造遺構198（図８・13・図版４の１・５の２・８の１～５）

調査区中央部において、東西５m、南北６mの範囲で非常に堅い焼土面を検出し、鋳造遺構198として命名した。その範囲内に火炉跡を６基、炉211～215、炉264を検出した。そのうち炉211と212は炉を据えた痕跡のみ確認した。炉215を除き炉壁はスサ入りの粘土で厚さ0.03～0.05mで作り、径0.25～0.3m、深さ0.3m程の規模で、いずれも土中に据える。各炉内からは多量の炭、鉄滓、鋳型が出土した。炉215は擂鉢状に凹めた掘形に粘土を塗り込めて溶壁を作る。熱により周辺0.1m程土が黒色化している。炉内は灰状のものが充填する。これらの炉跡は大阪住友銅吹所跡の発掘調査（1995年）で出土した炉の構造と良く似ている。16世紀末から17世紀前半頃の鋳造遺構である。

土壙343（図８・図版４の２）

調査区の南西部に位置する。東西長2.9m、南北長1.8m以上、深さ1.4m程の規模をもつ。南部は近代の井戸により削平を受けている。掘形は二段に落ち込む。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）砂泥層、にぶい黄褐色（10YR4/3）砂泥層の上下２層に分層できる。各土層からは土師器皿の完形品を含む土器類とともに炉壁、フイゴの羽口、鋳型、鉄滓などが多量に出土した。鋳造遺構に伴う廃棄穴と考えられる。

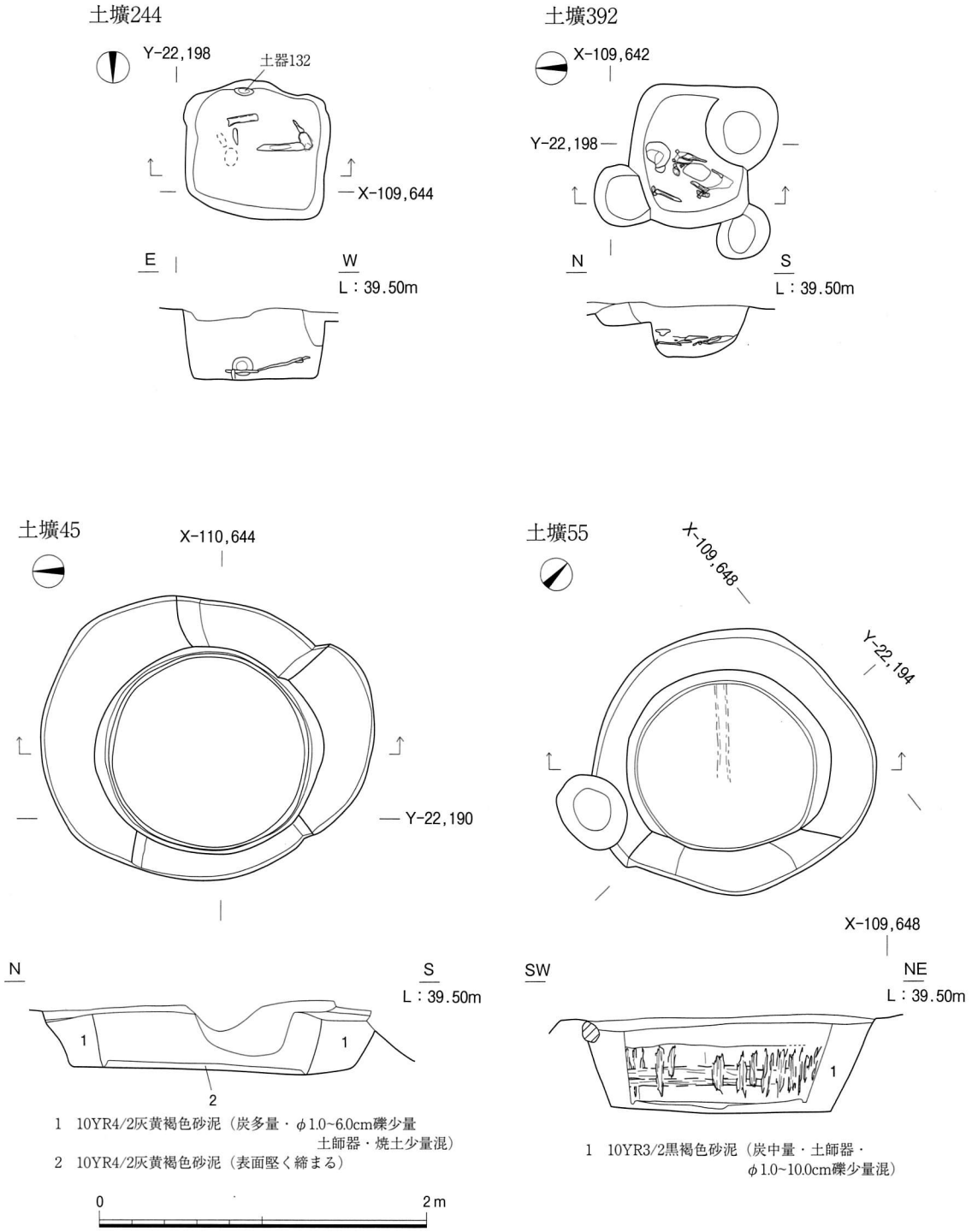
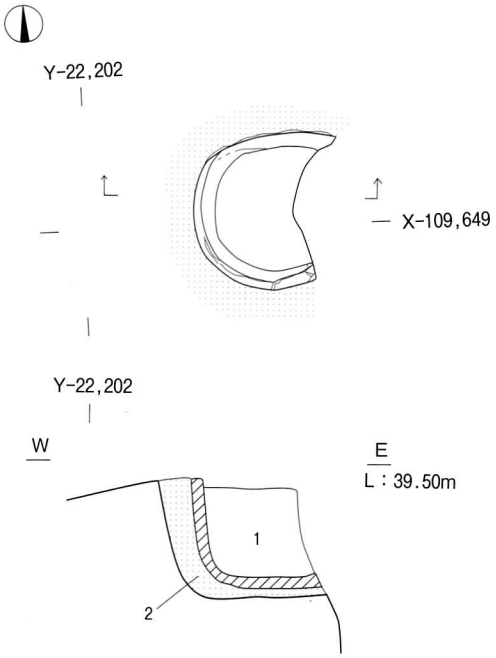


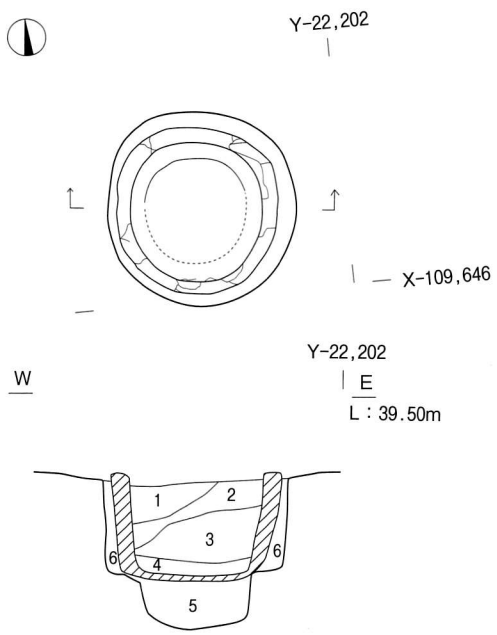
図12　土壙244・392・45・55実測図（1/40）

炉213



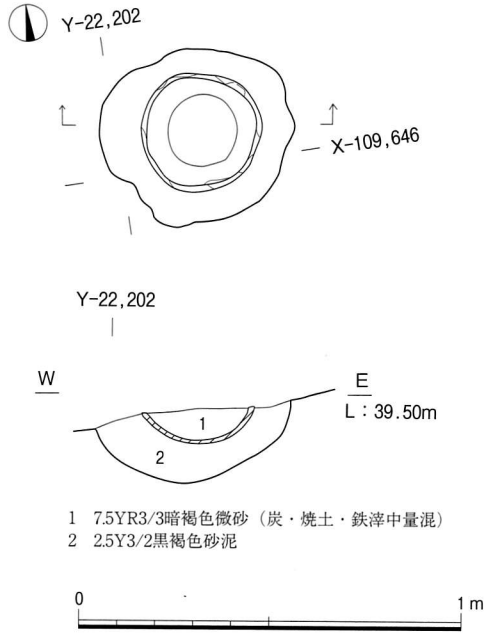
1　10YR3/2黒褐色砂泥（炭・鉄滓多量混）
2　7.5YR4/6褐色（焼土）

炉214



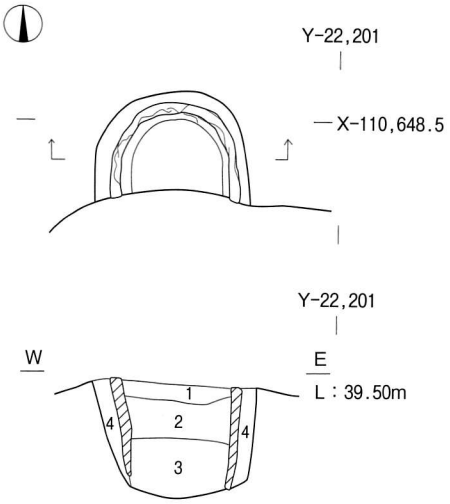
1　7.5YR2/3極暗褐色砂泥（炭・鉄滓多量混）
2　10YR3/3暗褐色微砂
3　10YR3/2黒褐色砂泥（鉄滓・鋳型片・φ1.0~3.0cm礫混）
4　10YR3/2黒褐色砂泥（φ1.0cm大の礫少量混）
5　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

炉215



1　7.5YR3/3暗褐色微砂（炭・焼土・鉄滓中量混）
2　2.5Y3/2黒褐色砂泥

炉264



1　7.5YR4/4褐色砂泥（炭・焼土混）
2　7.5YR4/2灰褐色粗砂（鉄・小礫・鉄滓多量混）
3　7.5YR3/3暗褐色粗砂（φ0.5~3.0cm礫・
　　炭・焼土・鋳型片・鉄滓多量混）
4　10YR3/3暗褐色砂泥（炭混）

図13　炉213～215・264実測図（1/20）

土壙259・260（図８・図版４の２）

調査区中央部西寄りに位置する。当初同一遺構としたが切り合い関係があることが分かり、別々の番号を付与した。南北長1.4m、東西長1.0m、深さ0.68mを測る。西壁は内彎する。土壙260は南北長1.0m以上、東西長0.8m、深さ0.6mを測る。いずれの掘形からも多量の焼土、炭とともに鉄滓、鋳型、フイゴの羽口などが出土した。17世紀前半。

土壙45・55（図８・12・図版１の１・７の７と８）

調査区東半部に位置する。２基とも桶を据えた遺構である。いわゆる埋桶式便槽といわれる便所遺構である。桶は径1.2m、残存高0.35mを測る。掘形は径1.6～2.0m程である。土壙55の埋土から土師器の小皿が大量に出土した。籌木の代わりに使用した可能性がある。

土壙52（図８・図版１の１）

調査区中央東部に位置する。東西長1.2m、南北長0.7m、深さ0.5mを測る。埋土はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂泥層で多量の炭が混じる。「魁手」といわれる赤絵碗が出土している。17世紀前半。

土壙11（図８）

調査区北東部北壁沿いに位置する。東西長2.0m、南北長1.1m以上で調査区北壁外に延び、深さ0.8mを測る。埋土は多量の炭を含み、銅滓なども出土している。17世紀前半。

柱穴280（図８）

調査区中央北部に位置する。径0.35m、深さ0.34mのピット状遺構である。埋土の灰黄褐色（10YR4/2）泥砂層より完形品の土師器皿10点程と土師器鉢が１点出土した。地鎮遺構と考えられる。

土壙93（図８）

調査区北東部東壁沿いに位置する。南北長1.2m、東西長1.0m以上で東部が調査区外となり、全形は不明である。深さ0.6mを測る。堀116の上面で成立する。埋土は褐灰色（10YR4/1）砂泥層、灰黄褐色（10YR4/2）砂泥層の上下２層に分層できる。陶磁器類に混じって坩堝、砥石、鉄鍋などが出土している。鋳造に関係するゴミ捨て穴と考えられる。17世紀前半。

Ⅲ　遺　　物

出土した遺物は整理箱に134箱ある。時代は縄文時代から江戸時代のものがあり、室町時代後期から江戸時代前期の土器類が大半を占める。遺物の種類には、縄文土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、木製品、金属製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年[註3]をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

縄文土器（図14・図版９）

室町時代後期の堀116の埋土に混入して１個体出土したものである。深鉢の口縁部である。口縁部外面に一条の突帯を巡らし、口縁端部と突帯の間に貝殻押圧文を施す。

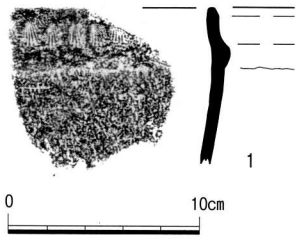


図14　堀116出土遺物実測図（1/4）

土壙103出土土器（図15）

土師器皿Ａ（２、３）、皿Ｎ（４）、須恵器（５、７）、白磁碗（６）などがある。須恵器鉢（７）は口径30cm、器高13.6cmの大型である。６は口縁端部に小さな玉縁をもつ。11世紀後半。

土壙438出土土器（図15・図版９）

土師器皿Ａ（８、９）、土師器皿Ｎ（10）、灰釉陶器（11）がある。９は完存品である。11は内面のみに施釉する11世紀後半のⅣ期新。

土壙287（図15）

土師器皿Ａｃ（12）、皿Ｎ（13～16）がある。16の口縁端部は強くヨコナデする。12世紀前後のⅤ期古に属する。

土壙172出土土器（図15）

土師器Ａｃ（17、18）、皿Ｎ（19～22）がある。12世紀前半。

井戸166出土土器（図16・図版９）

土師器皿Ｎ（23～31）、皿Ｓ（32～35）、瓦器羽釜（36）がある。32は底部がやや凹む。皿Ｎの小は口径７～９cm台、皿Ｓの小は口径8.3cm、大は口径16cm台、器高3.0～3.2cmを測る。16世紀後半の頃のものである。

土壙320出土土器（図17）

土師器皿Ｎ（37～41）、皿Ｓ（42～45）、瓦器羽釜（46、51、52）、瓦器火舎（53）、焼締陶器（48～50）、青磁碗（47）などがある。46はミニチュアの羽釜である。48は常滑の甕、49は備前擂鉢、櫛目は７本単位である。50は信楽擂鉢である。53は内外面を平滑に仕上げる。47は青磁印

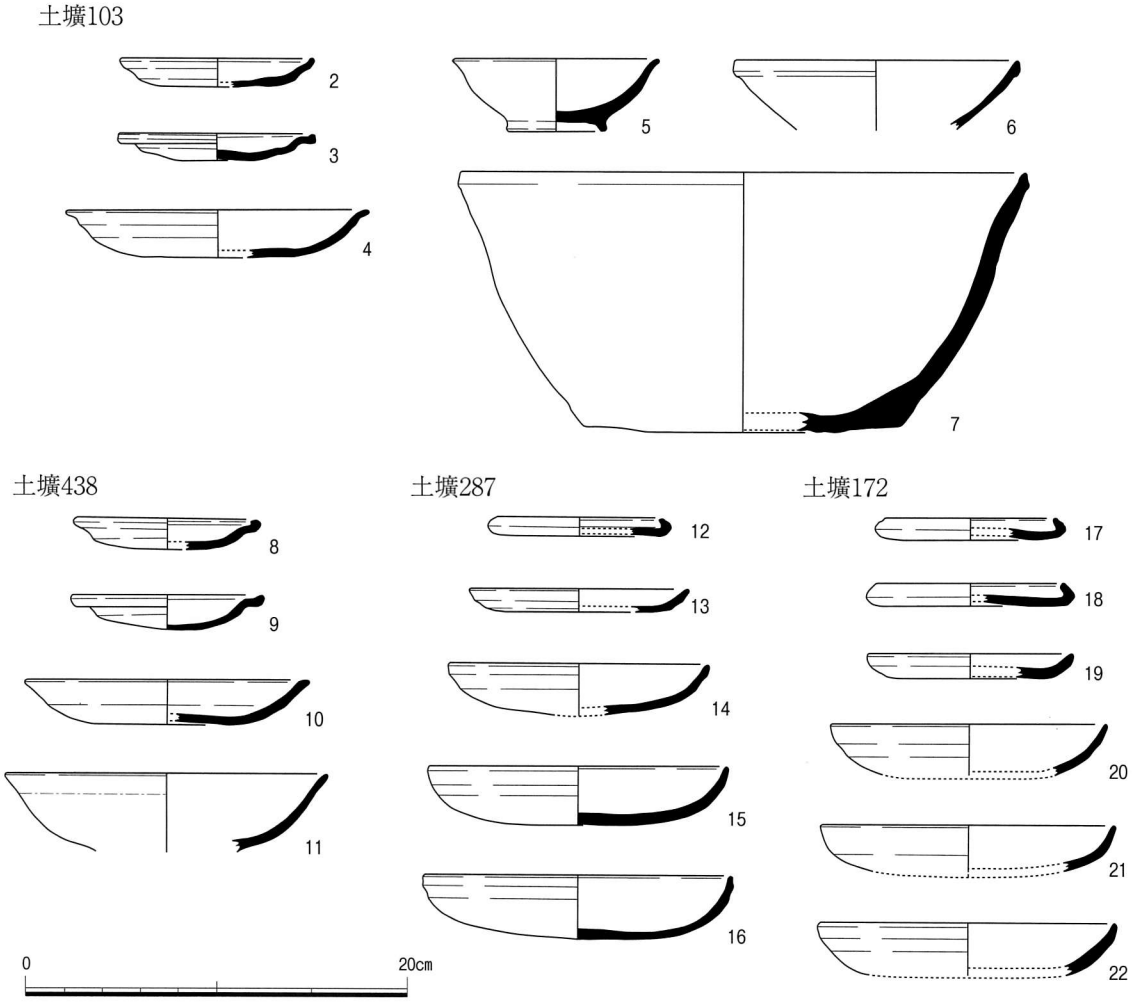


図15　土壙103・438・287・172出土遺物実測図（1/4）

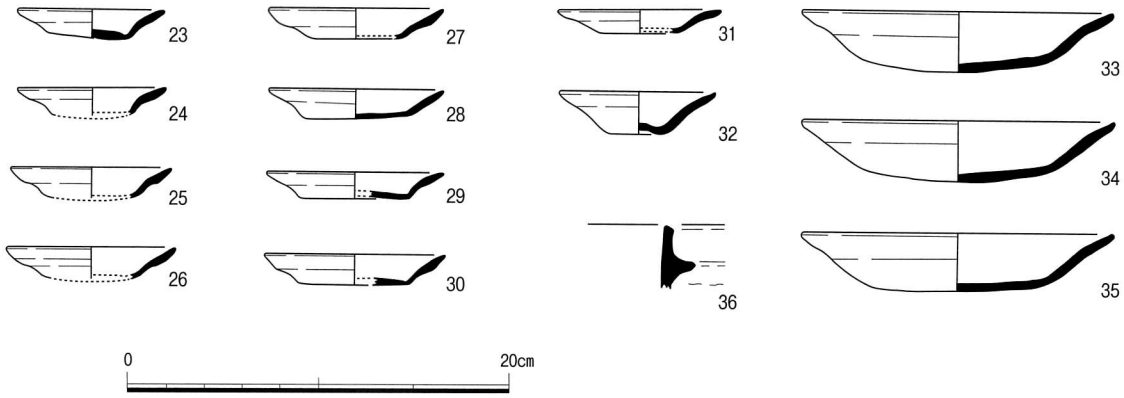


図16　井戸166出土遺物実測図（1/4）

花文碗である。高台内面部を除き黄味を帯びたオリーブ色の釉を施す。15世紀後半から16世紀にかけてのものである。

土壙190出土土器（図18）

土師器皿Ｓ（54、55）、瓦器羽釜（58）、瓦器火舎（59）、白磁皿（56）、青磁碗（57）がある。56は細かな貫入が認められる。57は青磁劃花文碗である。オリーブ色の釉を施す。

堀116・木枠遺構119出土土器（図19・図版９）

土師器皿Ｓｂ（60）、皿Ｓ（61～65）、皿Ｎ（66～68、74、75）、施釉陶器（69、70、73）、染付碗（71、72）がある。69は美濃瀬戸天目茶椀、70の皿は口縁部内面及び外面の一部に褐釉を施す。

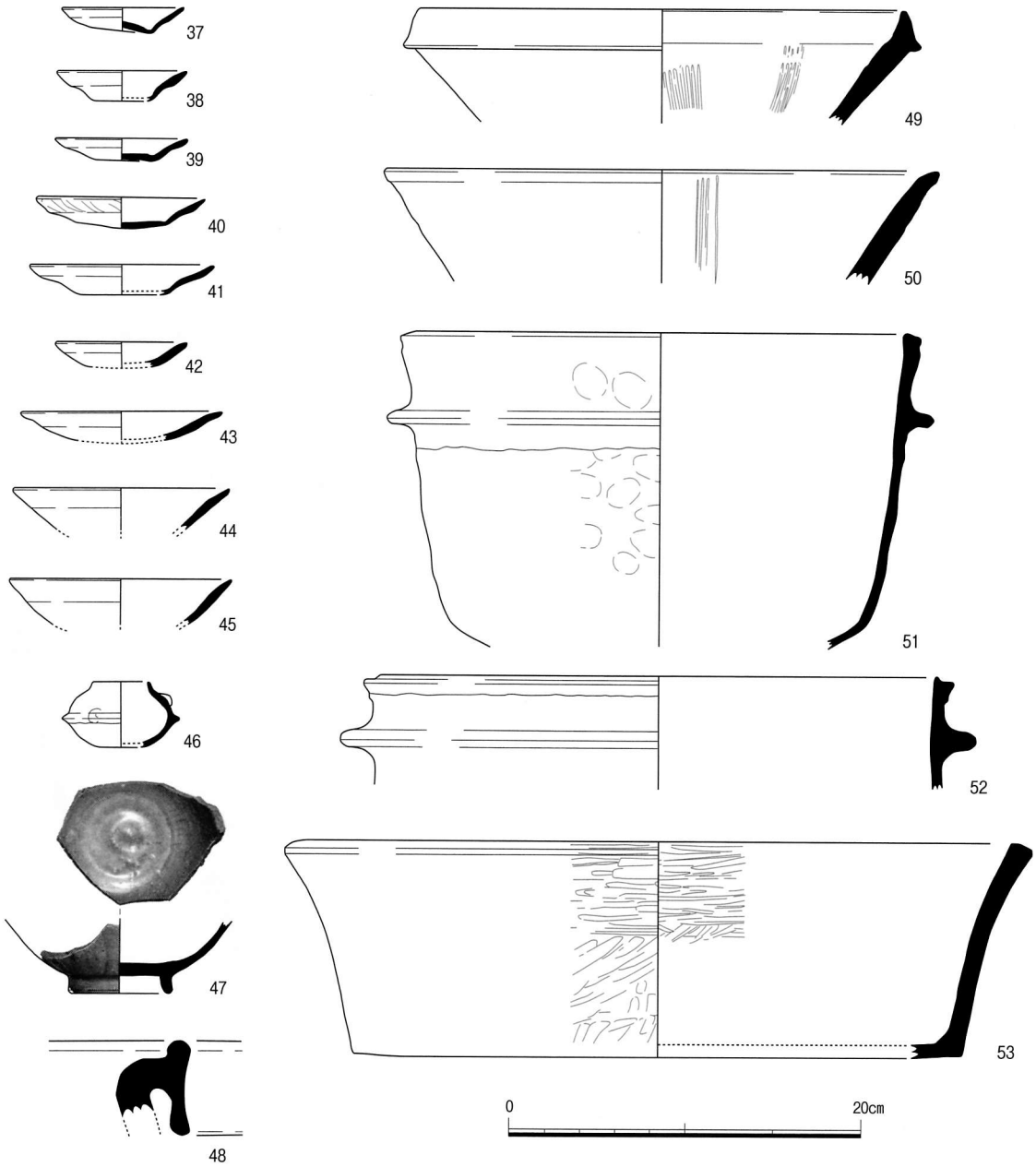


図17　土壙320出土遺物実測図（1/4）

美濃瀬戸系。73は美濃瀬戸鉢、口縁部内外面に灰釉を施す。内面はきわめて平滑である。71、72は明染付である。74、75は木枠遺構119出土。IX期新からX期中に収まる土器群である。

堀127出土土器（図20・図版９）

土師器皿Ｓ（76～79）などがある。いずれも埋土の上層より出土したものである。X期中の段階のものである。

土壙151出土土器（図21）

土師器皿Ｓ（80～83）、瓦器火舎（84）がある。土師器皿は口径10.2～12.0cmを測る。

堀201出土土器（図22・図版９）

土師器皿Ｎｒ（85～94）、皿Ｓｂ（95～103）、皿Ｓ（104～121）、施釉陶器（122～125）、焼締陶器（129）、白磁皿（126）、染付碗（127、128）などがある。122～124は美濃瀬戸の皿、124は鉄釉を施す。125は天目茶碗。129は備前擂鉢である。126は体部下半を除き白色の釉を施す。高台畳付部の一部を削り取る。127、128は明染付である。X期新。

土壙244（図23・図版９）

土師器皿Ｎｒ（130、131）、皿Ｓ（132）がある。132は口径12.1cm、器高2.3cmを測る。底部内面に浅い圏線が認められる。

土壙117（図23）

土師器皿Ｓ（133～136）がある。口径12cm前後、器高2.0cmを測る。底部内面に浅い圏線が認められる。

井戸181（図23・図版９）

土師器皿Ｎｒ（137）、皿Ｓｂ（138）、皿Ｓ（139、140）、施釉陶器皿（141）がある。141は美

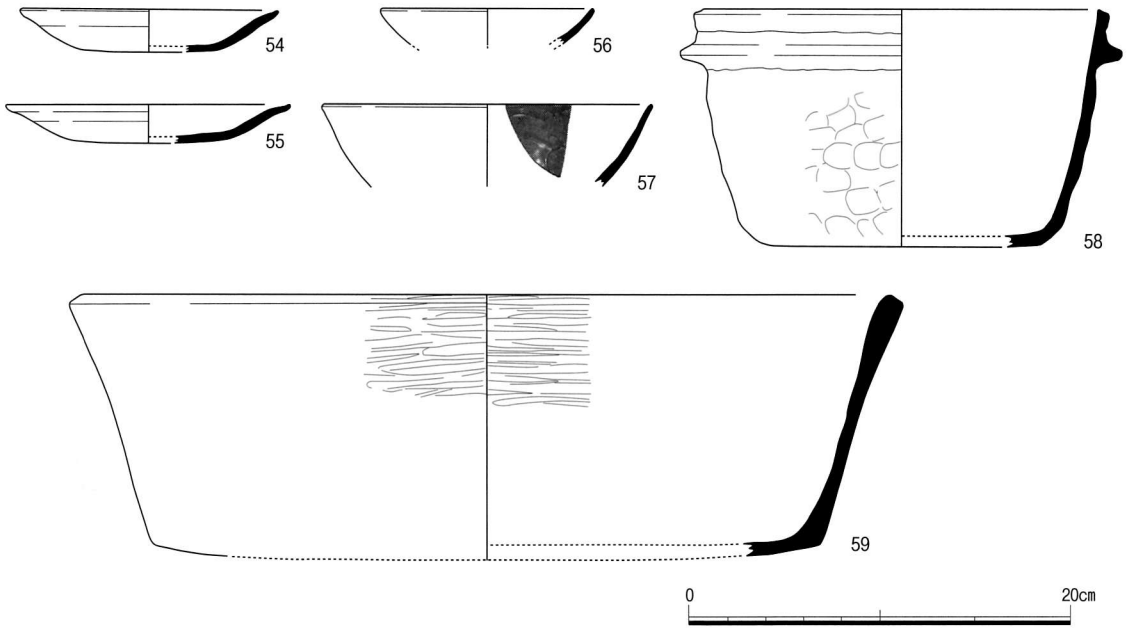


図18　土壙190出土遺物実測図（1/4）

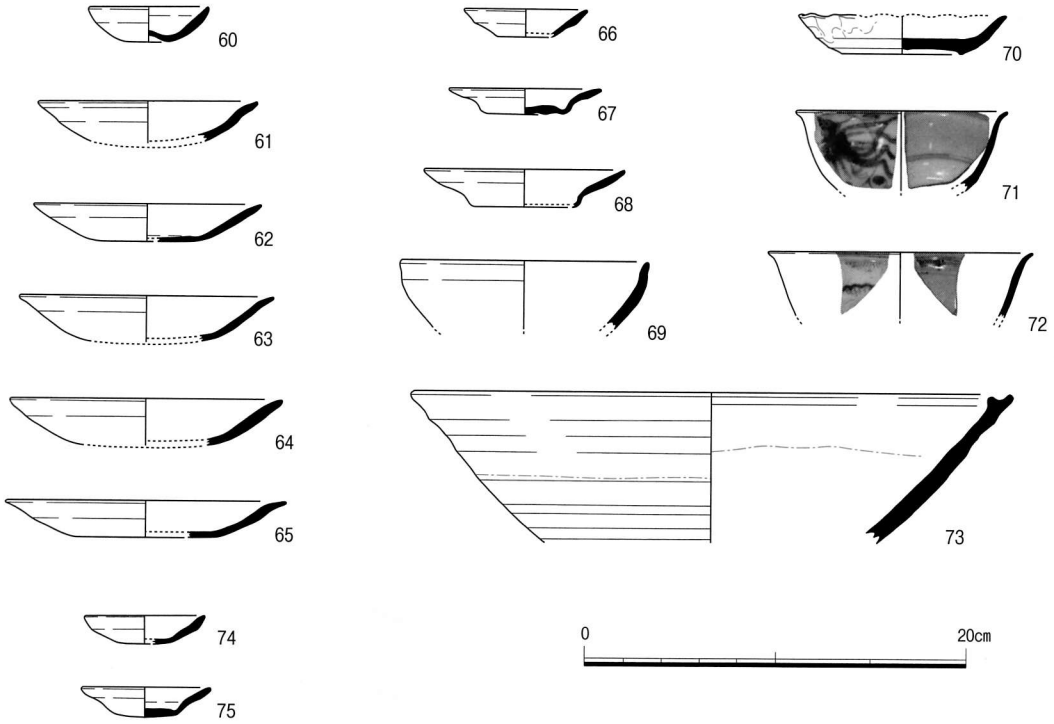


図19　堀116・木枠遺構119出土遺物実測図（1/4）

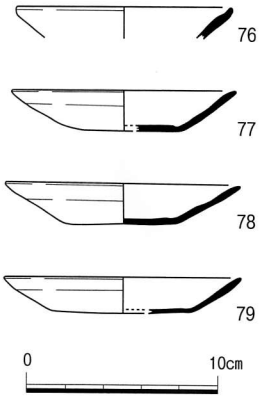


図20　堀127出土遺物実測図（1/4）

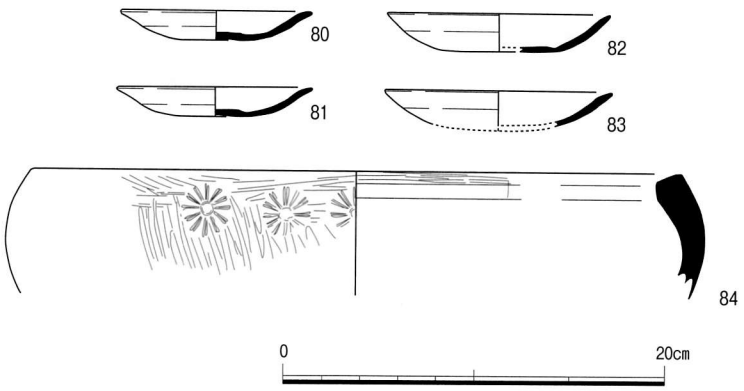


図21　土壙151出土遺物実測図（1/4）

濃瀬戸灰釉陶器皿である。見込みに菊花文を押印する。完存品である。

土壙429（図23・図版９）

土師器皿Ｓｂ（142）、皿Ｓ（143）がある。

土壙237（図23）

土師器皿Ｎｒ（144～146）、皿Ｓｂ（147）、皿Ｓ（148、149）がある。

井戸20（図23・図版10）

土師器皿Ｎｒ（150）、土師器皿Ｓ（151～153）、土師器鍋（154）、施釉陶器（155、156）があ

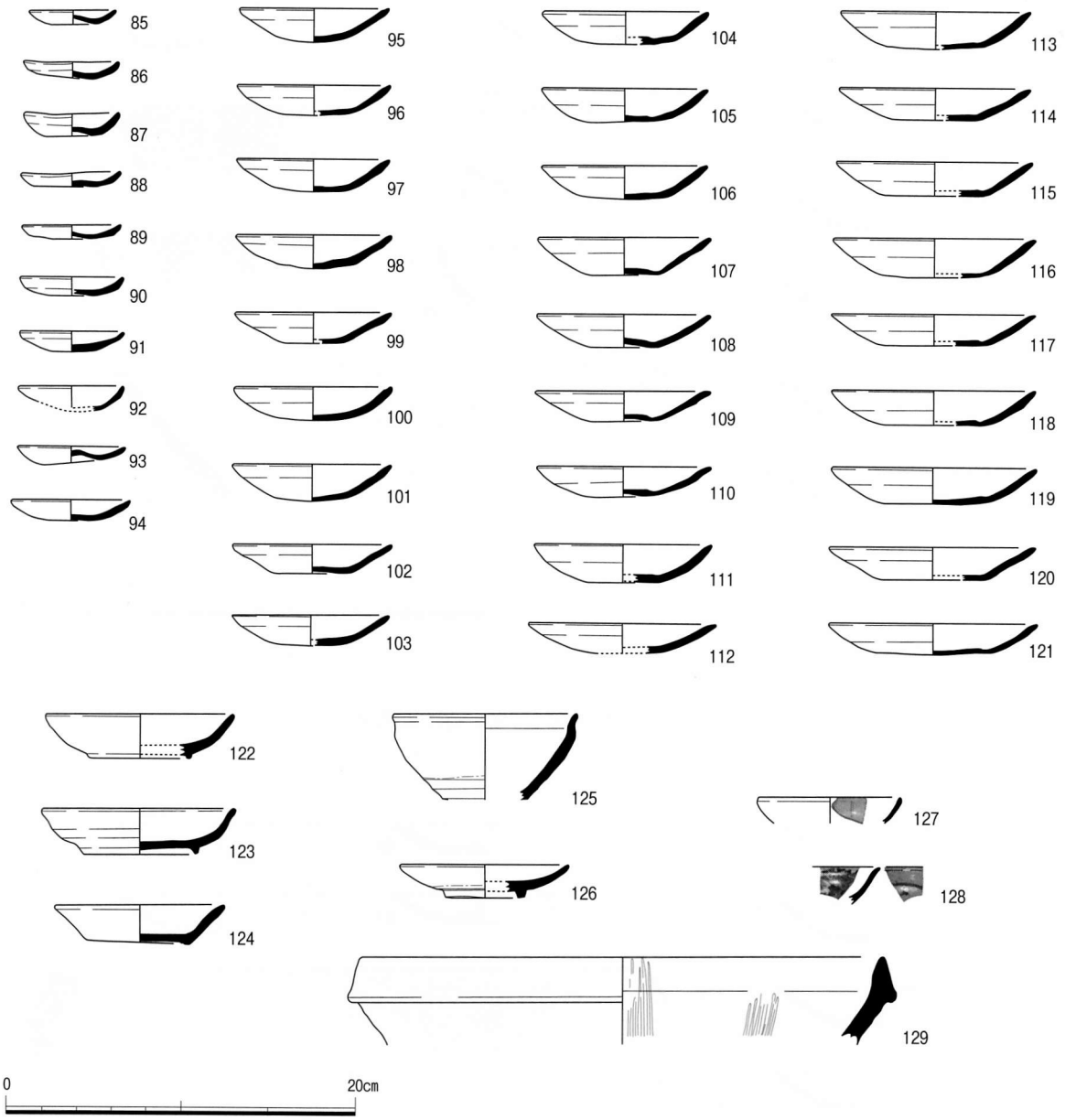


図22　堀201出土遺物実測図（1/4）

る。154は焙烙鍋、外面に煤が付着する。155は茶入れ、二次焼成を受けている。口径2.1cm、器高7.9cmを測る。底部下半を除き釉薬を施す。底部外面に糸切り痕明瞭に残る。156は唐津系の輪花皿である。輪花部の内面に三条の絵付けをおこなう。内面底部に４カ所の胎土目が残る。17世紀前半。

土壙343（図23・図版10）

土師器皿Ｎｒ（157～159）、土師器皿Ｓｂ（160、161）、土師器皿Ｓ（162～164）がある。皿Ｓは底部内面に明瞭な圏線が認められる。

土壙260（図23）

土師器皿Ｎｒ（165）、皿Ｓｂ（166）がある。

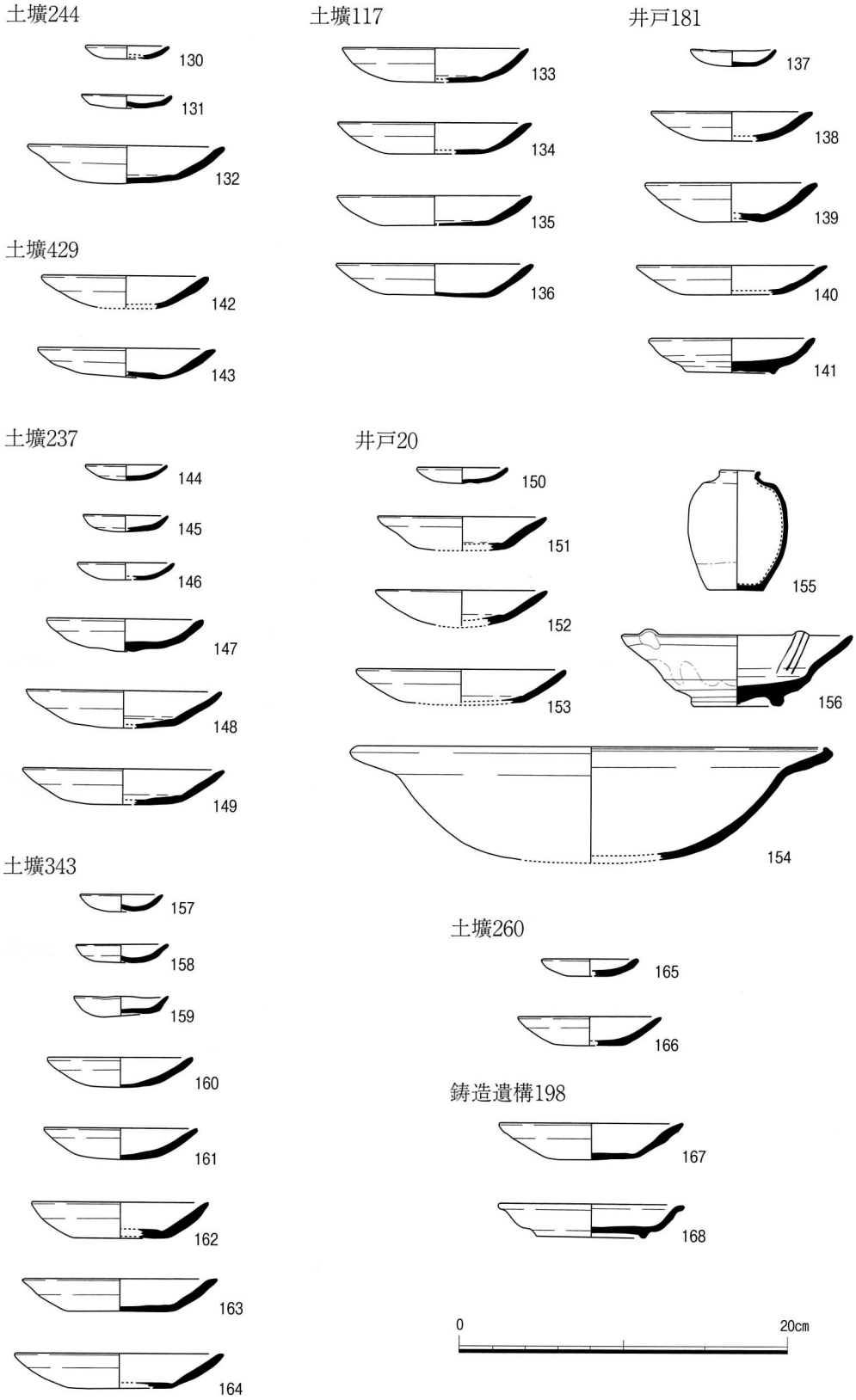
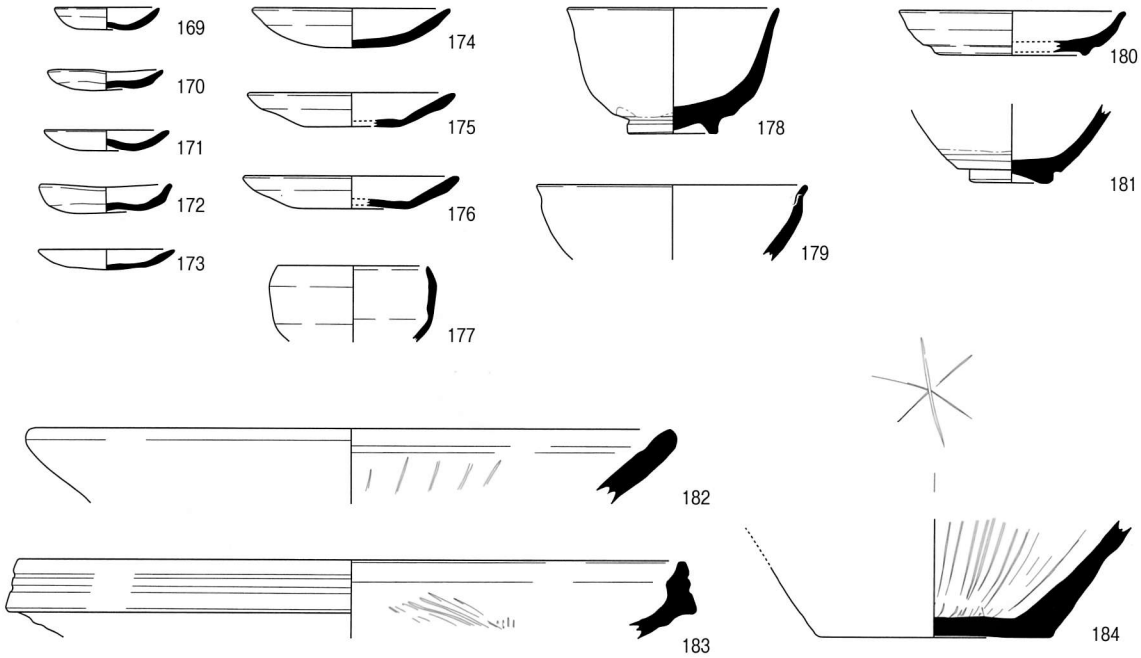


図23　土壙244・117・429・237・343・260・井戸181・20・鋳造遺構198出土遺物実測図（1/4）

土壙45



土壙55

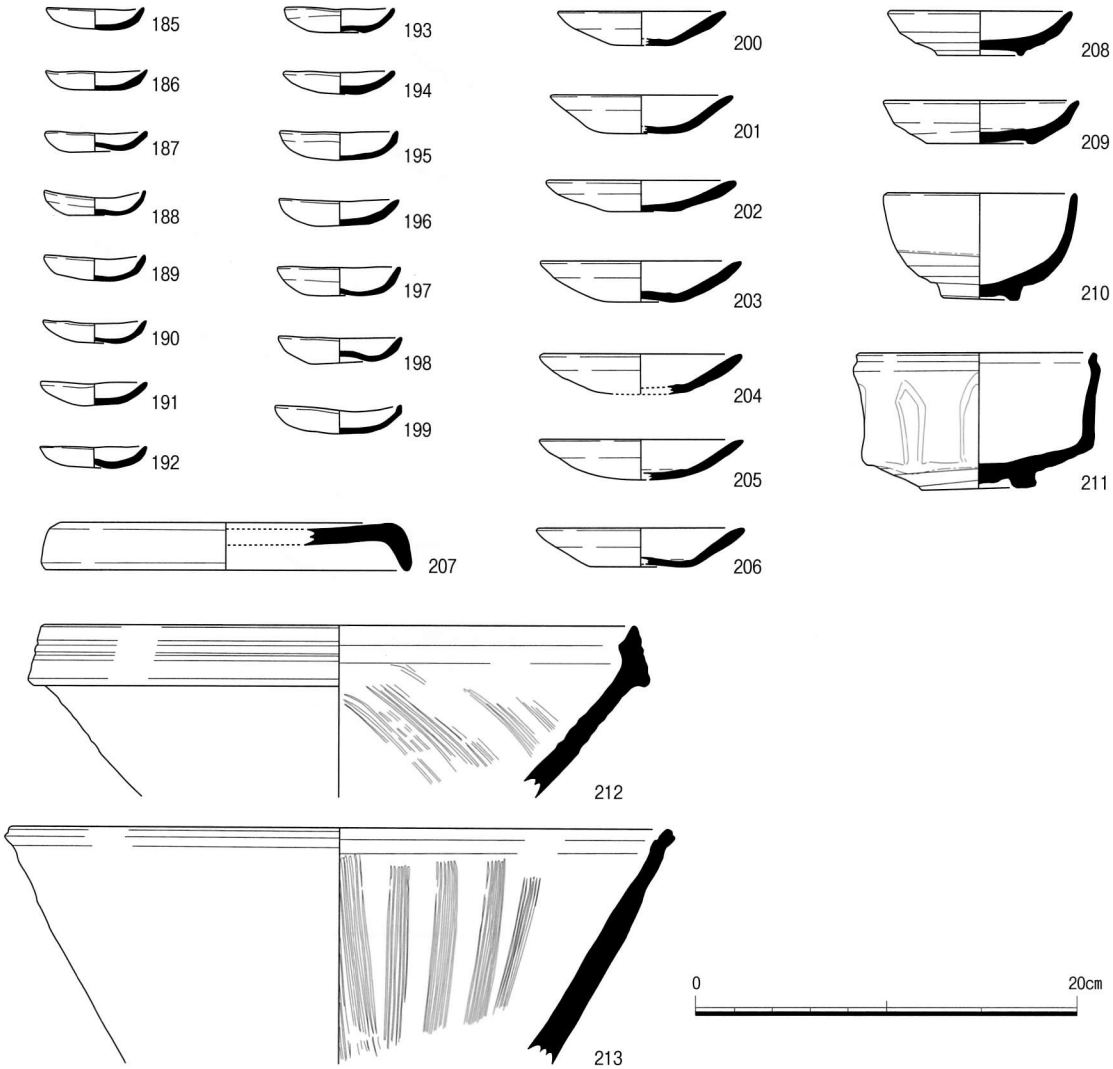


図24　土壙45・55出土遺物実測図（1/4）

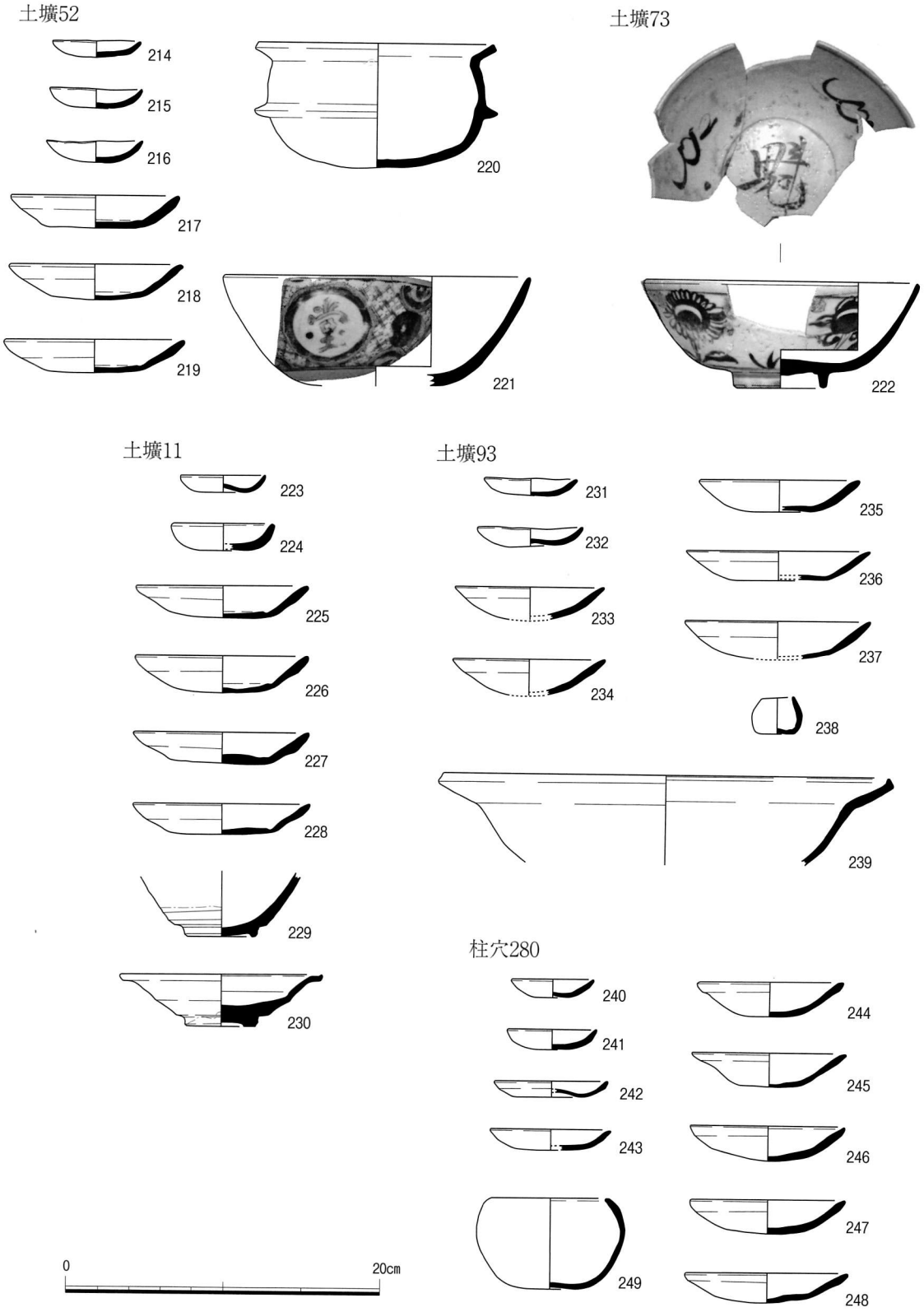


図25　土壙52・73・11・93・柱穴280出土遺物実測図（1/4）

鋳造遺構198（図23）

土師器皿Ｓ（167）、施釉陶器皿（168）がある。いずれも完形品である。168は志野皿である。全体に白釉を施し、細かな貫入が認められる。

土壙45（図24・図版10）

土師器皿Ｎｒ（169～173）、皿Ｓｂ（174）、皿Ｓ（175、176）、鉢（177）、施釉陶器（178～181）、焼締陶器（182～184）がある。178は唐津椀、179、181は美濃瀬戸天目茶碗、鉄釉を施す。180は志野皿である。182、184は丹波擂鉢、183は備前擂鉢である。171、177、181は掘形出土。17世紀前半。

土壙55（図24・図版10）

土師器皿Ｎｒ（185～199）、皿Ｓｂ（201、202）、皿Ｓ（200、203～206）、瓦器蓋（207）、施釉陶器（208～211）、焼締陶器（212、213）がある。208、209は美濃瀬戸皿、210は椀、211は黒沓茶椀、体部下半部に窯印とみられるヘラ書きがある。212は備前擂鉢、213は丹波擂鉢である。200は掘形出土。

土壙52（図25・図版10）

土師器皿Ｎｒ（214～216）、土師器皿Ｓ（217～219）、瓦器羽釜（220）、呉須赤絵鉢（221）がある。220は土師質である。

土壙73（図25・図版10）

呉須赤絵鉢（222）はいわゆる「魁手」といわれるもので、中国南方産の赤絵である。

土壙11（図25・図版11）

土師器皿Ｎｒ（223、224）、皿Ｓ（225～228）、施釉陶器（229、230）がある。229は美濃瀬戸天目茶碗、230は唐津皿、見込みに胎土目が残る。

土壙93（図25・図版11）

土師器皿Ｎｒ（231、232）、皿Ｓｂ（233、234）、皿Ｓ（235～237）、小壺（238）、焙烙鍋（239）がある。

柱穴280（図25・図版11）

土師器皿Ｎｒ（240～243）、皿Ｓｂ（244～247）、皿Ｓ（248）、鉢（249）がある。大半が完形品である。

瓦　　類（図26・27・図版12～14）

平安時代から江戸時代の軒丸瓦25点、軒平瓦23点、飾り瓦１点の計49点が出土している。

単弁八葉軒丸瓦（250）

堀127第１層出土。単弁で輪郭線がある。中房に「下」銘を入れる。外区に珠文を配する瓦当部と丸瓦部を接合した後、タテ方向の指ナデ痕が、瓦当上面及び裏面とも顕著に残る。胎土は硬質で、青灰色を呈する。森ヶ東瓦窯産である。平安時代中期。

単弁五葉蓮華文軒丸瓦（251）

２・Ｂ区整地層③出土。弁間にタテ方向の直線文を施す。中房に１＋８の蓮子、弁間に蕊を配する。瓦当裏面に布目のしぼり痕が認められる。胎土は微砂粒を含み灰白色、外面は暗灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（252）

土壙103出土。中房の回りに雄蕊帯が巡り、１＋８の蓮子を、周縁部に珠文を密に配する。瓦当裏面は板ナデ痕が残る。胎土は精良で灰白色、外面は暗灰色を呈する。南都系瓦である。[註4]

単弁蓮華文軒丸瓦（253）

３・Ｄ～Ｅ区整地層②出土。複弁の可能性がある。外区に二重の圏線が巡る。瓦当裏面に指押さえ痕が顕著に残る。胎土は砂粒を含み、淡灰色を呈する。

単弁蓮華文軒丸瓦（254）

室町後期の土壙104出土。珠文を密に配する。瓦当裏面指ナデ調整をおこなう。胎土は砂粒を多く含み黄灰色、やや焼きが甘い。二次焼成を受けた可能性がある。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（255）

堀116第３層（下層）出土。外区の珠文配置にばらつきがある。中房は盛り上がり、１＋４の珠文を配する。瓦当裏面から丸瓦にかけてナデ調整が顕著に認められる。胎土は精良で黒灰色を呈する。

三巴文軒丸瓦（256）

堀116第２層（中層）出土。左巻きの巴文である。尾部が互いに接する。瓦当裏面端部を一条にナデて仕上げる。周縁部は平滑に仕上げる。胎土は微砂粒を含み緻密、灰色を呈する。

三巴文軒丸瓦（257）

堀116第１層（上層）出土。左巻きで尾部が互いに接する。珠文を密に配する。瓦当裏面指押さえ痕顕著に残る。胎土は白色微砂粒を含み精良、暗灰色を呈するが二次焼成を受けている。

三巴文軒丸瓦（258）

井戸20出土。左巻きで尾部が互いに接しない。白色砂粒を多く含み、精良、全体に二次焼成を受けており赤褐色を呈する。

唐草文軒平瓦（259）

堀127第１層出土。笵押しが浅い。『木村古瓦収集瓦図録』[註5]森ヶ東瓦窯（230）と同笵である。胎土は砂粒を含み精良、淡橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。

唐草文軒平瓦（260～265）

堀116出土。260は瓦当凹面はヨコケズリ、側面タテケズリ、顎部凸面はヨコケズリ、平瓦部凸面はタタキ板痕顕著に残る。胎土は黒色砂粒を含み精良暗灰色を呈する。『木村図録』栗栖野瓦窯跡（83）と同笵。261は瓦当凹面は布目、凸面は縄目タタキが際まで認められる。胎土は微砂粒を含み精良、二次焼成を受けて、赤橙色を呈する。262は瓦当凹面ヨコケズリ、平瓦凸面ナデ調整。胎土は微砂粒を含み精良、灰色を呈する。263は瓦当上端及び凸面はヨコケズリをおこな

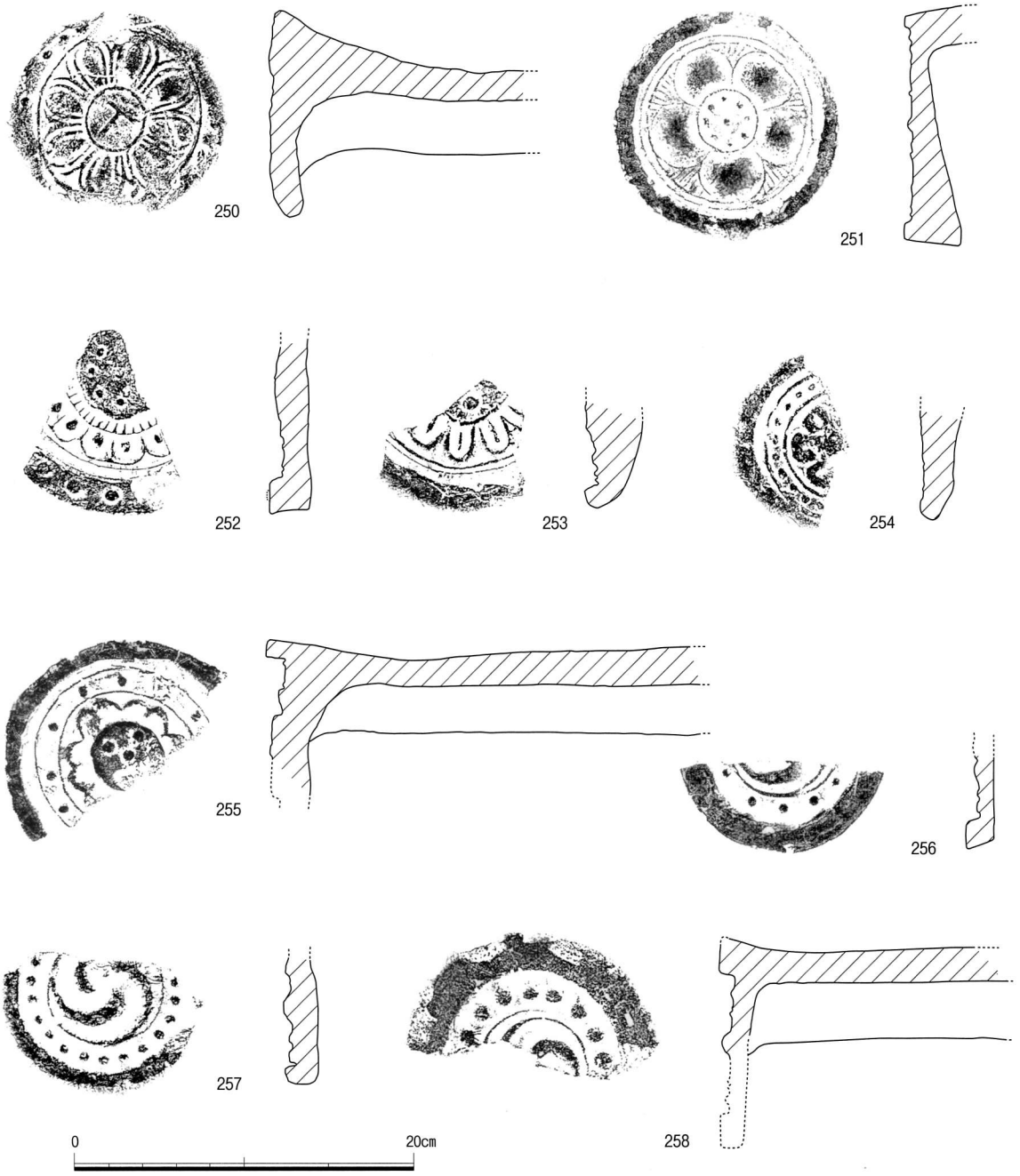


図26　軒瓦拓影・実測図（1/4）

う。胎土は微砂粒を含み精良、黒色を呈する。264は瓦当凹面布目は端のマツリ痕が認められる。胎土は砂粒を含み精良、瓦当面は二次焼成を受け橙灰色を呈する。265は瓦当凹面及び凸面はヨコケズリをおこなう。胎土は微砂粒を含み精良、黒灰色を呈する。260、261、263、265は第１層出土。262、264は第４層出土。

唐草文軒平瓦（266）

柱穴272出土。外区の一部に唐草文が認められる。胎土は微砂粒を含み精良、暗黄灰色を呈する。

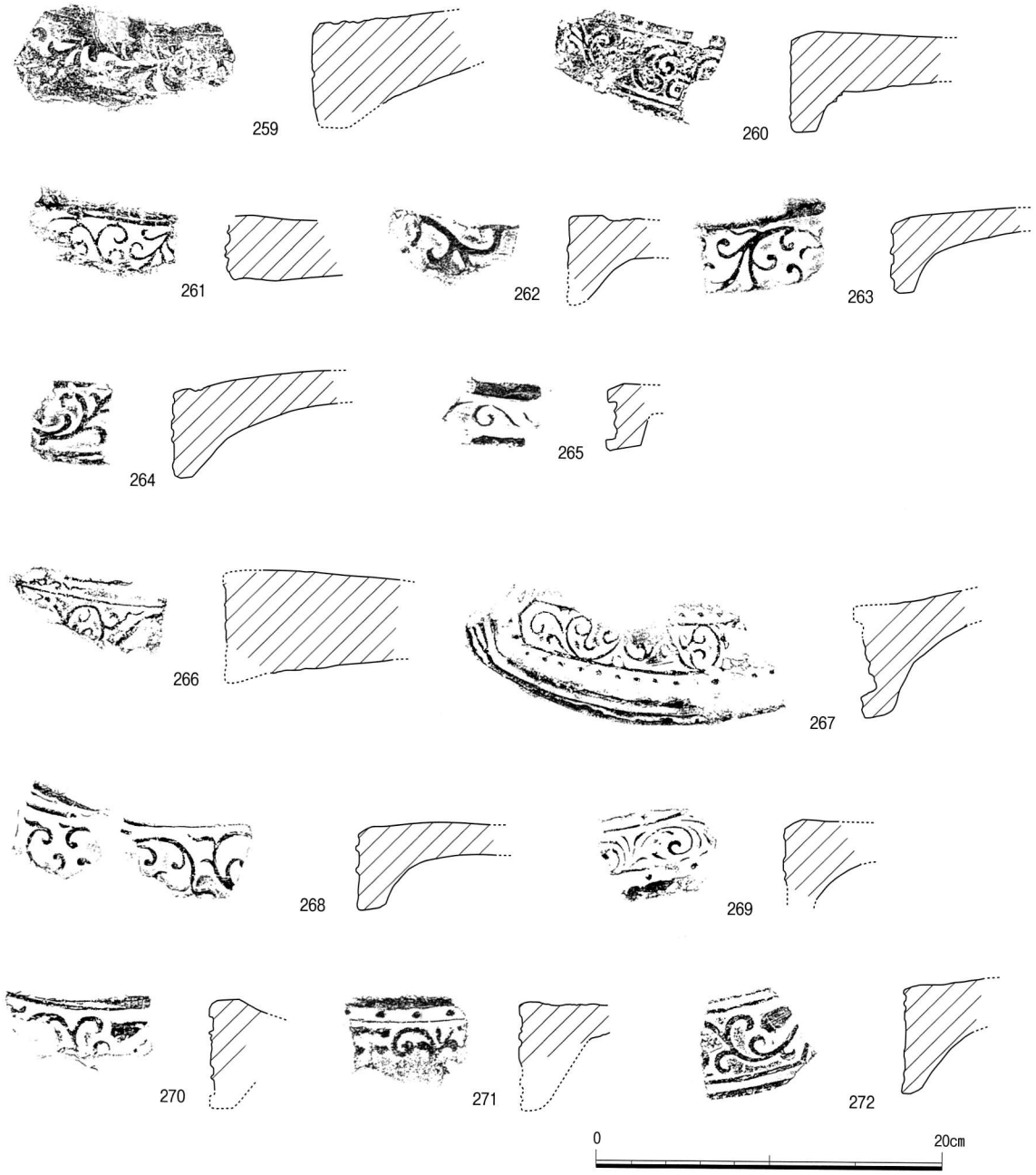


図27　軒瓦拓影・実測図（1/4）

均整唐草文軒平瓦（267）

２・Ｄ区整地層③出土。中心飾りはＣ字背向である。平瓦凹面はヨコナデを施す。胎土は微砂粒を含み精良、淡灰色を呈する。丹波系である。

唐草文軒平瓦（268）

３・Ｅ区整地層③出土。瓦当凹面及び凸面ヨコケズリをおこなう。平瓦凹面糸切り痕明瞭に残る。胎土は砂粒を含み精良、灰白色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（269）

５・Ｄ区整地層③出土。胎土は砂粒を含み精良、黄灰色を呈する。

唐草文軒平瓦（270、272）

土壙58出土。270は瓦当凹面ヨコケズリ。胎土は白色砂粒を含み精良、二次焼成を受け黄橙色を呈する。272は瓦当上端まで布目痕が認められる。胎土は270と酷似する。

唐草文軒平瓦（271）

土壙343出土。瓦当凹面ヨコケズリ、平瓦凹面は粗い布目痕が残る。胎土は砂粒を含み精良、淡灰色を呈する。

土 製 品（図28・図版11）

加 工 品（273）

江戸前期の土壙325出土。径2.8cm、厚さ0.8cmを測る。円形で中心付近に孔を穿つが貫通していない。瓦などを元に加工したものとみられる。

取　　瓶（274）

江戸前期の井戸14出土。径6.0cm、器高2.3cmを測る。内面に金の湯玉が残る。

鋳　　型（275、276、317～320）

275、276は鏡の鋳型である。ガス抜きのための斜格子溝を全体に施す。胎土はスサ入りの粘土で白色砂粒を多く含む。『京羽二重』にはこの付近に鏡師が居たことが記されている。275は江戸前期の土壙115、276は江戸中期の土壙13出土。317は土壙298出土。「龍」の顔部分の型。高さ5.0cm、幅3.5cmを測る。318～320は土壙343出土。同じものが多量に出土している。319は長径8.5cm程を測る。320は残存長8.5cm程を測る。「龍」の頭部と体部とみられる。

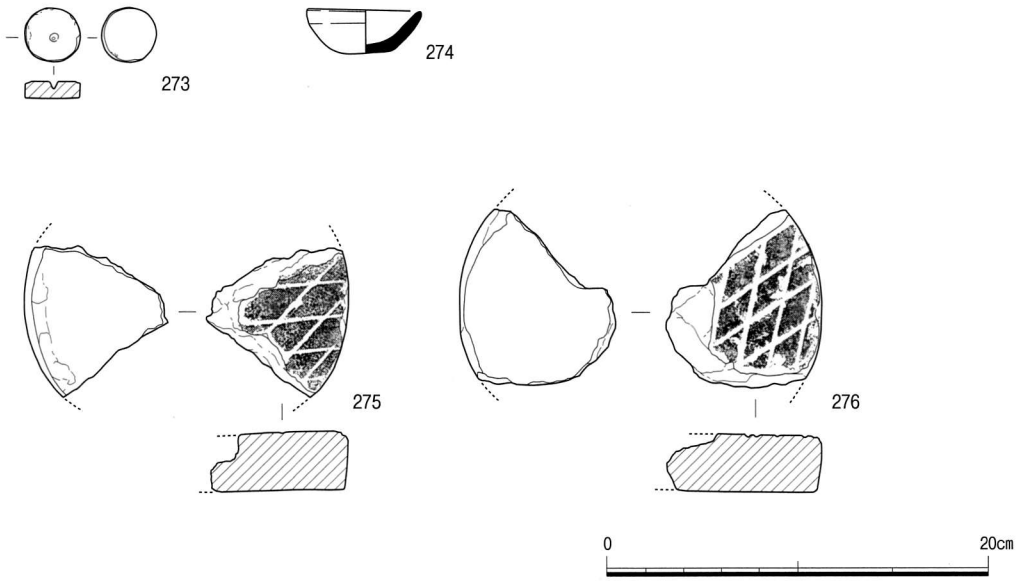


図28　土製品実測図（1/4）

羽　　口（316）

江戸前期の土壙219出土。フイゴの羽口である。口径4.0～5.0cm程を測る。

石 製 品（図29・図版14）

石　　帯（277）

江戸中期の井戸26出土。蛇尾である。残存長4.5cm、厚さ0.65cmを測り、暗緑色を呈する。潜り穴は横平行に配置する。混入品である。

硯（278、279）

278は堀116第４層（最下層）出土。円面硯である。279は土壙73出土。長方形の硯で、長径13.5cm、短径6.0cmを測る。

五 輪 塔（280）

江戸中期の土壙40出土。空輪と風輪が一石に作る。風輪の下部に凹みを作る。花崗岩製。

金属製品（図30・31）

銭貨、釘、金具などがあり、その内銭貨が50枚程出土している。ここでは比較的残存状態が良好で銭貨名が判明した銭貨35枚について拓影図を示す。

銭　　貨（281～315）

開元通寶（または開通元寶[註6]）から寛永通寶までのものがある。渡来銭に関しては国内で私鋳さ

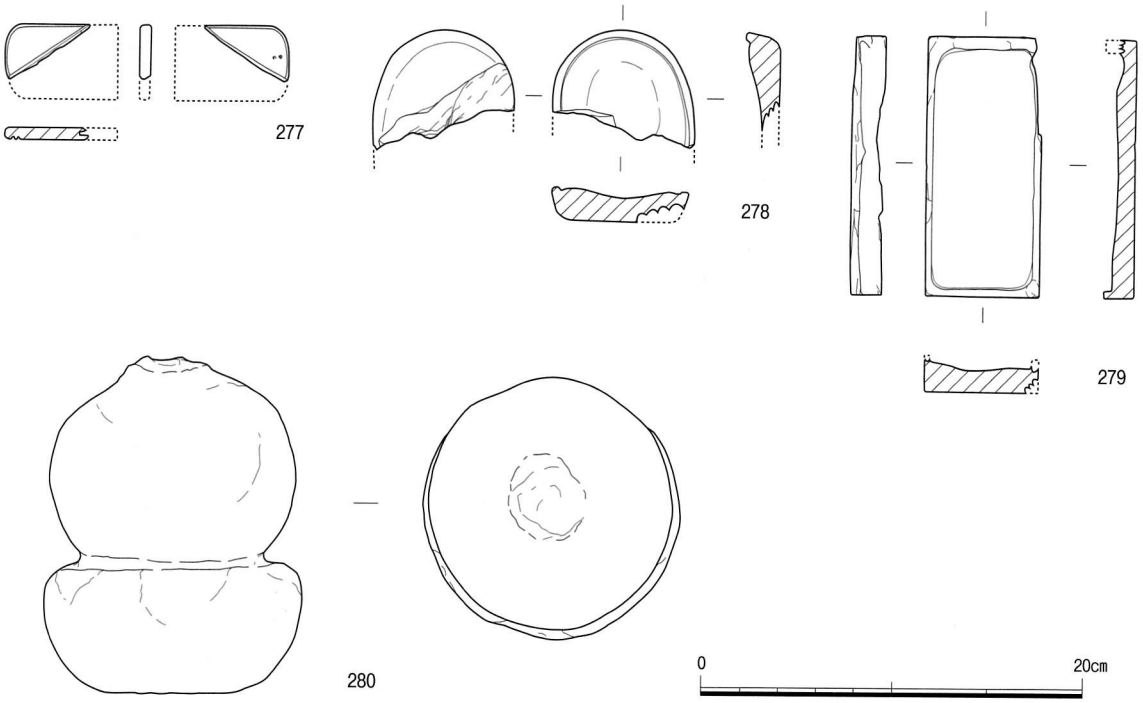


図29　石製品実測図（1/4）

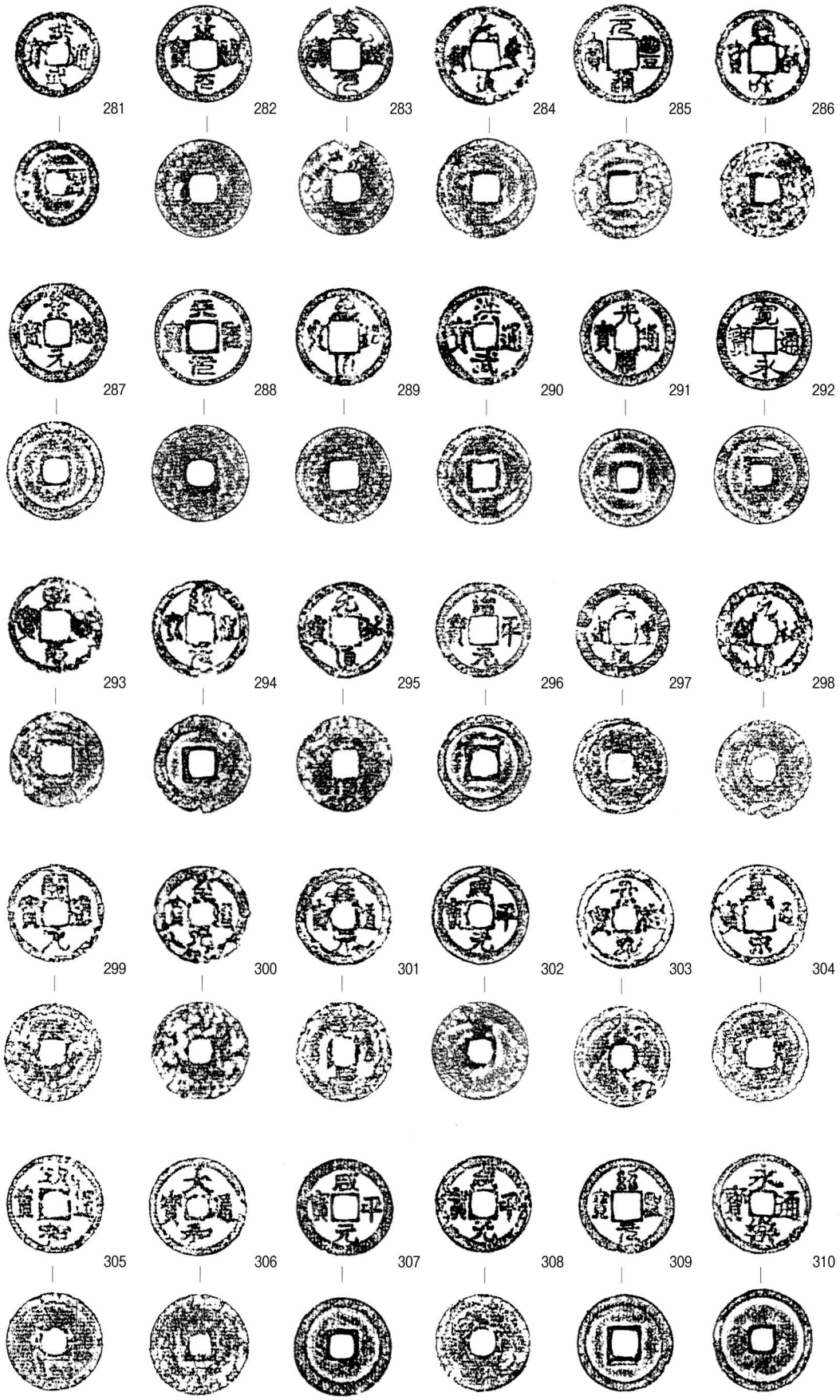


図30　銭貨拓影図（1/1.5）

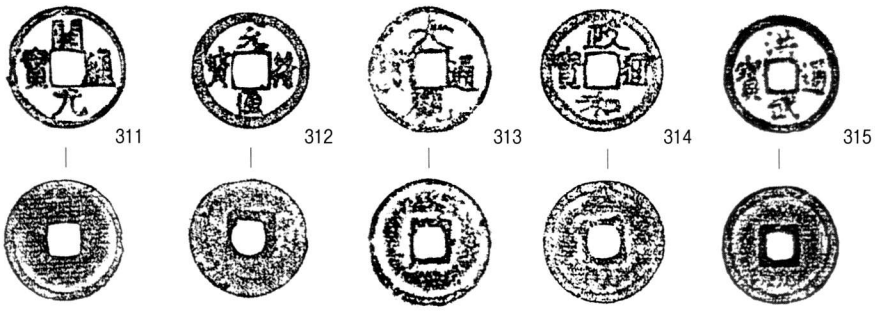


図31　銭貨拓影図（1/1.5）

れた可能性を含む。皇朝十二銭文は出土していない。柱穴284とした遺構から六道銭が出土した。２枚ずつ背合わせにし、６枚を緡でつないで埋納する。これとは逆に２枚ずつ表を合わせて緡銭として六道銭を埋納する鎌倉時代の土壙墓の例がある[註7]。

表１　出土銭貨一覧表

番号	銭貨名	国名	初鋳年	出土遺構
281	洪武通寶	明	1368	堀116
282	景祐元寶	北宋	1034	〃
283	熙寧元寶	〃	1068	〃
284	元豊通寶	〃	1078	〃
285	〃	〃	〃	〃
286	宣和通寶	〃	1119	〃
287	景德元寶	〃	1004	堀201
288	天聖元寶	〃	1023	〃
289	元祐通寶	〃	1086	〃
290	洪武通寶	明	1368	〃
291	光順通寶	安南	1460	〃
292	寛永通寶	日本	1636	堀201上面
293	熙寧元寶	北宋	1068	柱穴284
294	紹聖元寶	〃	1094	〃
295	元祐通寶	〃	1086	〃
296	治平元寶	〃	1064	〃
297	元豊通寶	〃	1078	〃
298	元祐通寶	〃	1086	〃
299	開元通寶	唐	621	土壙55
300	至道元寶	北宋	995	〃
301	〃	〃	〃	〃
302	咸平元寶	〃	998	〃
303	景德元寶	〃	1004	〃
304	皇宋通寶	〃	1038	〃
305	政和通寶	〃	1111	〃
306	大和通寶	安南	984	〃
307	咸平元寶	北宋	998	整地層②
308	〃	〃	〃	〃
309	紹聖元寶	〃	1094	〃
310	永楽通寶	明	1408	〃
311	開元通寶	唐	621	土壙259
312	元符通寶	北宋	1098	土壙56
313	大観通寶	〃	1107	土壙320
314	政和通寶	〃	1111	井戸242
315	洪武通寶	明	1368	土壙343

Ⅳ まとめ

今回の調査においては、室町時代後期の大規模な堀跡を三条検出し、いずれも当地に妙覚寺城が置かれていた時代のもので、15世紀後半から16世紀後半までの妙覚寺城の変遷の一端が明らかとなった。また、平安時代の鴨院については、明確な建物遺構などは検出できなかったが、11世紀代の土壙、掘立柱穴跡などから土器類とともに当時の軒瓦などが出土しており、邸宅の一部に瓦を葺いていたことがうかがえる。また「鴨院（井）」の由来となった邸宅内にあった古井戸にいつも鴨が群がっていたとの伝承は、鴨院の占地である七町及び八町には中世において「竜（躍）池」と呼ばれる自然の池があった様子が江戸時代の「中昔京師地図」や「中古京師内外地図」などに記録されており、また承元３年（1209）の「伏見宮御記録」（御移徒雑記[註8]）には十町（押小路殿）に「清泉あり」と記されており、この辺り一帯は湧水による自然の池が広がっていたことがうかがえる。また、十町における2002年度の調査[註9]においても平安時代の遺構面において西側に低くなる地形・池200を検出しており、後世に竜池と呼ばれる自然の池が平安時代に遡ることが報告されている。おそらく鴨院は一帯に広がる自然の池を苑池として取り込んだ殿舎が置かれていたと考えられ、そして湧水を当時井戸水として使用していたことによってそのような伝承を生んだものと考えられる。

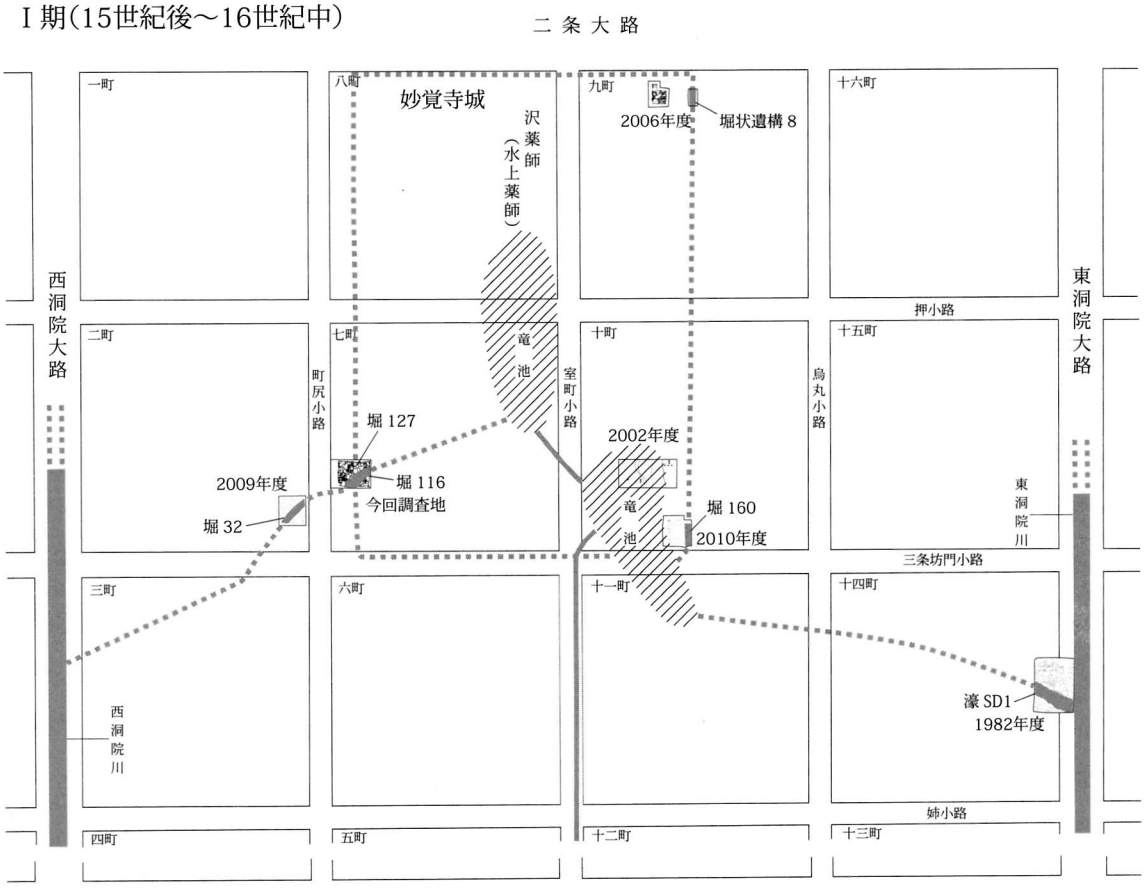
妙覚寺城の変遷

今回の調査においては南北方向の堀127と堀201、北東から南西方向に斜行する堀116を検出した。南北堀127は第３面で検出した。幅２～３ｍ、深さ0.8ｍ程の規模をもち断面逆台形を呈する。また、堀底の標高38.3ｍを測る。町尻小路東築地推定ラインより10数ｍ宅地側に入り込む。堀底にシルト層などが無く、出土遺物も堀底からはほとんど出土しなかった。これは頻繁に底浚いがおこなわれていたことを示す。堀の埋土からは土器類が整理箱に２箱程出土したが、９割以上が平安から鎌倉時代のもので混入品である。軒瓦も２点（250、259）出土しているがいずれも平安時代のものである。埋土第１層から出土した土師器皿はＸ期中頃のもので、16世紀中頃にはこの堀は埋没したものと考えられる。

東隣の十町における2010年度の調査[註10]においても南北方向の堀跡が検出されている。その堀160は西肩部のみ確認したもので、幅2.2ｍ以上、深さ1.1ｍの規模をもち、堀の形状は逆台形、堀底38.3ｍ前後と報告されている。今回の堀127より一回り大きいものとみられるが、堀の形状及び土層堆積、堀底の標高などが堀127と極めて似ている。堀160から出土した土師器皿はⅨ期新の段階のものが多く、最も新しいものはＸ期中に位置付けられている。この堀160は十町の東西中心線上に位置する。堀127と堀160の埋没時期はほぼ等しいと考えられる。

北隣の九町においても2006年度に調査[註11]がおこなわれて、南北方向の堀状遺構８が検出されている。両肩が調査区外のため幅は不明だが、深さは1.0ｍ、底の標高は39.2ｍ程である。堀状遺構

Ⅰ期(15世紀後～16世紀中)



Ⅱ期(16世紀中～16世紀後)

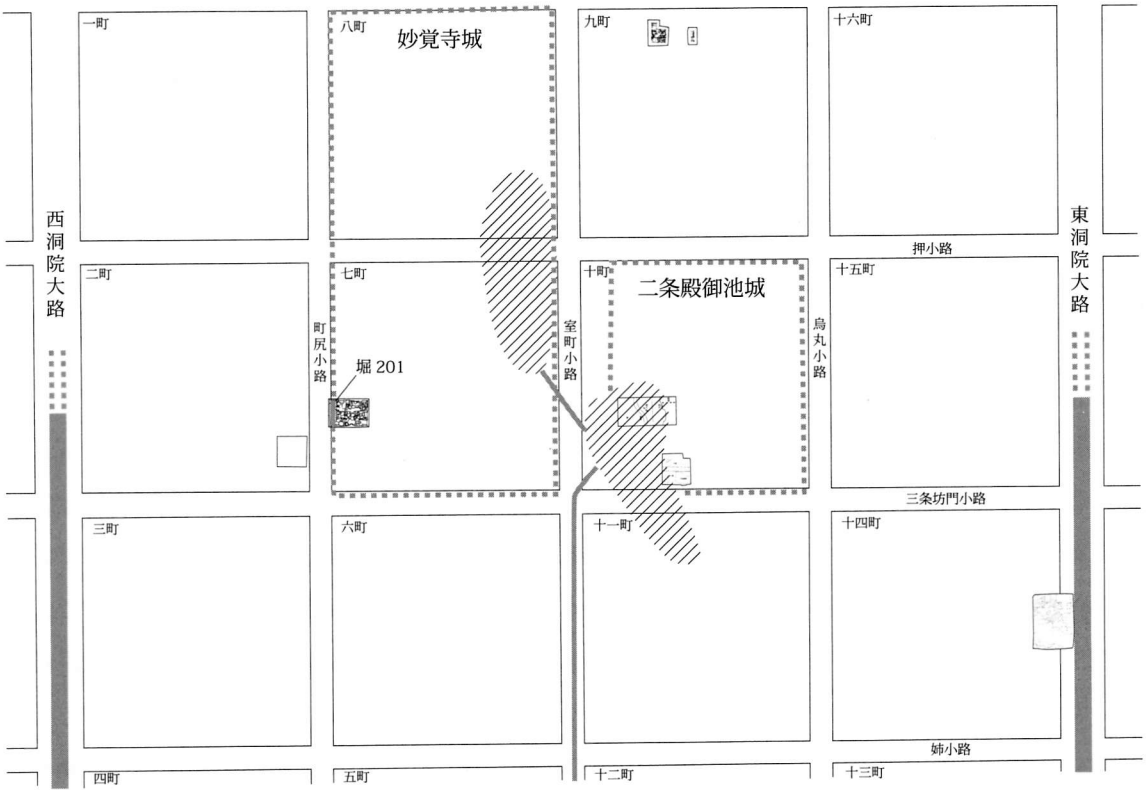


図32　妙覚寺城域推定変遷図（1/4,000）

８は十町の堀160と同じく九町の東西中心線上にあり、同一の堀の可能性がある。埋土からはXI期古の桃山時代から江戸時代初期の遺物が出土しているが、やや古期の様相をもつ土師器も検出されており、埋没時期の相違として判断できる。

北東から南西方向の斜行堀116は第２面で検出した。幅3.0～4.5m、深さ1.9～2.8mの大規模なもので、堀の形状はＶ字形である。底の標高は36.6～37.2mを測る。南北の堀127を横断する。西隣接地の二町の調査[註12]においても北東から南西方向の斜行堀32を検出しており、幅3.7m、深さ2.15m、堀底の標高36.5mを測り、掘形はＶ字形を呈する。堀116と堀32はともに形状規模とも酷似しており、またいずれも16世紀中頃に埋没しており、同一堀とみられる。堀116は町尻小路では直交して堀32に繋がる様子がうかがえる。この堀116の北東方向には竜池が存在し、竜池より水を引き、堀32を経由して西洞院川に流れ込んでいるものと考えられる。なお堀116も出土遺物の大半が平安から鎌倉時代までの混入品で、堀底からも顕著な出土遺物はなかった。

また、十四町で1982年度[註13]におこなわれた調査で北西から南東方向の斜行濠SD１が検出されている。濠SD１は幅６～７ｍ、深さ２ｍで東洞院大路の東洞院川に合流する。濠SD１は室町時代後期の遺物が15箱出土したとされているが、土器実測図等の提示が無く、詳細は不明であるが、堀116と同様の性格をもち、この濠SD１の北西方向に竜池が存在し、その池から水を引いている可能性が高い。

以上の堀127、堀160、堀状遺構８、堀116、濠SD１の検出位置をもとに「中昔京師地図」及び「中古京師内外地図」に記された竜池を勘案してＩ期の妙覚寺城域を復原したのが試案図32である。竜池を取り込んで東西一町半、南北二町と想定した。東西の広さ一町半とした場合、室町通を堀が横断する状況を呈するが、これは応仁文明の乱によって荒廃した京中の状況[註14]から可能性としてあり得るものと考えられる。時代は下がるが、2012年度におこなわれた旧二条城の調査[註15]においても旧二条城の内濠が室町通を横断する形で復原されており、室町通が部分的に閉鎖された状況をうかがわせる。

斜行堀116の性格に関しては妙覚寺城の構えの一部と考えるのか、竜池の排水施設あるいは給水のための施設なのか、それともいずれをも兼ねているのか現段階では判断できない。また、斜行濠SD１については、十四町を斜めに横断する状況から判断して、東洞院大路西側溝への水の給排水的性格を有しているものと考えることができる。堀116及び濠SD１ともに宅地内を斜めに横断していることから考えて、何らかの緊急性をもって堀を開鑿したことが想定できる。下京における構えの堀に水を供給するために掘られたものであろうか。あるいは「中古京師内外地図」の竜池が１カ所のみ描かれているが、「中昔京師地図」では竜池は２カ所に増えて描かれている。これは15世紀後半から16世紀にかけて竜池の湧水量が増大した可能性をうかがわせるもので、西洞院川と東洞院川に排水するために町内を斜行する堀が掘られた可能性も考えられる。現段階ではいずれとも判断し難く今後の課題としておきたい。

次に調査区の西端で検出した堀201は第１面で検出したもので、東肩部のみ確認した。幅６ｍ以上、深さ1.6mを測り、形状は逆台形である。堀底37.7mを測る。堀底には厚さ0.2m程のシル

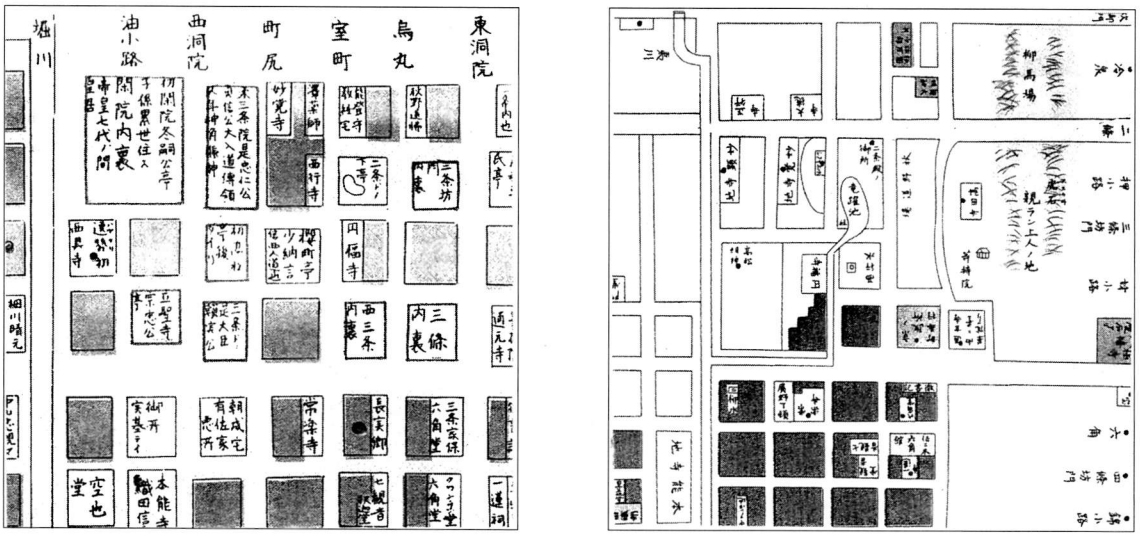


図33　中古京師内外地図（左）と中昔京師地図抜粋[註16]

ト層が堆積しており、そのシルト層より完形品を含む多くの土師器皿や陶器類が出土した。土器類の年代は16世紀後半のX期新の段階に属するもので、天文法華の乱以後に再建された妙覚寺城の堀跡であろう。この堀跡は七町と八町の南北二町を占める妙覚寺城を囲繞するものと考えられる。

以上、今回の調査においては妙覚寺城の構えの一部である堀跡を各期にわたって検出することができた。また「竜池」の存在を江戸期の絵図をもとに、堀116、堀32、濠SD１などの斜行堀跡を竜池へとつなげる根拠を初めて明らかにすることができたと考える。ただその性格付けについてはあらためて今後の検討課題としたい。

註１　『角川日本地名大辞典　26　京都府』角川書店　1991年。
『日本歴史地名体系27　京都市の地名』平凡社　1979年。
『平安京提要』角川書店　1994年。
『平安時代史事典』角川書店　1994年。

註２　上村憲章『平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡―東三条殿―』古代文化調査会　2009年。

註３　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

註４　上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究―13・14―』元興寺文化財研究所考古学研究室　1978年。

註５　『木村捷三郎収集古瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

註６　東野治之「開元通寶の銭文―高昌・日本の銭貨との関連から―」『考古学研究紀要２』辰馬考古資料館　1991年。

註７　水谷明子『平安京左京五条三坊五町　烏丸綾小路遺跡』古代文化調査会　2013年。

註８　『史料京都の歴史　９　中京区』平凡社　1985年。

註９　山本雅和『平安京左京三条三坊十町（押小路殿・二条殿）跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2002年。

註10　柏田有香『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2010年。

註11　大立目一『平安京左京三条三坊九町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2006年。

註12　註２と同じ。

註13　辻純一・平尾政幸「左京三条三坊」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年。

註14　高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版　1983年。

註15　上村憲章『平安京左京一条三坊六町・旧二条城跡』古代文化調査会　2012年。

註16　『新訂増補　故実叢書　中古京師内外地図　中昔京師地図』吉川弘文館　1955年。

報告書抄録

ふりがな	みょうかくじじょうあと
書　　名	妙覚寺城跡
副 書 名	平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	家崎孝治
編集機関	古代文化調査会
所 在 地	〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中１丁目４番地125-1404
発行年月日	2013年10月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
妙覚寺城跡（みょうかくじじょうあと） 平安京（へいあんきょう） 左京三条（さきょうさんじょう） 三坊七町（さんぼうななちょう）・ 烏丸御池遺跡（からすまおいけいせき）	京都市（きょうとし） 中京区（なかぎょうく） 新町通（しんまちどおり） 押小路下る（おしこうじさが） 中之町（なかのちょう）	26100	1	35度 00分 41秒	135度 45分 24秒	2013.04.18 ～ 2013.06.28	315㎡	マンション 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
妙覚寺城跡 平安京左京 三条三坊七町・ 烏丸御池遺跡	城館跡 都城跡 集落跡	平安時代 室町時代 弥生～ 古墳時代	堀、土壙、井戸 掘立柱建物、鋳造遺構	縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、土製品、木製品、銭貨	妙覚寺城の堀跡

	Aランク点数（箱数）	内　　訳	Bランク（箱数）	Cランク（箱数）	出土箱数合計
点数及び箱数	320点 （12箱）	縄文土器１点、土師器195点、須恵器２点、灰釉陶器１点、施釉陶器20点、焼締陶器10点、瓦器９点、輸入陶磁器11点、軒瓦23点、土製品９点、石製品４点、銭貨35点	135箱	0	147箱

図　　版

1　東半部第１面全景（北から）

2　東半部第２面全景（北から）

1　東半部第３面全景（北から）

2　東半北部第４面（北から）

1　堀116（北東から）

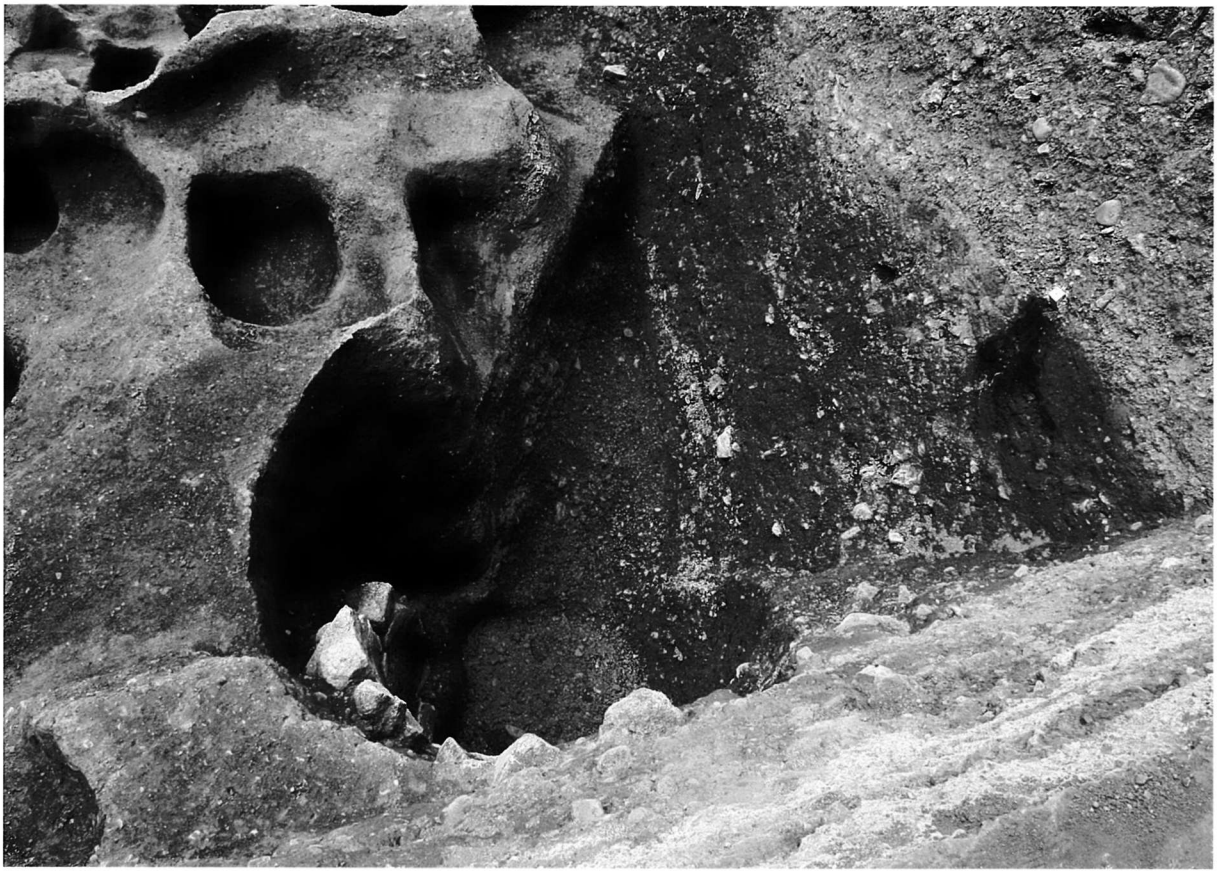
2　井戸166（南から）

1　西半部第１面全景（北から）

2　西半部第２面全景（北から）

1　西半部第３面全景（北から）

2　鋳造遺構198（南東から）



1　堀116（南西から）

2　堀201土器出土状況（東から）

1　調査地近景（北東から）

2　堀201北壁断面（南から）

3　堀116セクション断面（北東から）

4　堀127セクション断面（北から）

5　木枠遺構119（北西から）

6　井戸166木枠出土状況（南から）

7　土壙45（西から）

8　土壙55（南から）

1　炉214（南から）

2　炉215（南から）

3　炉213（南から）

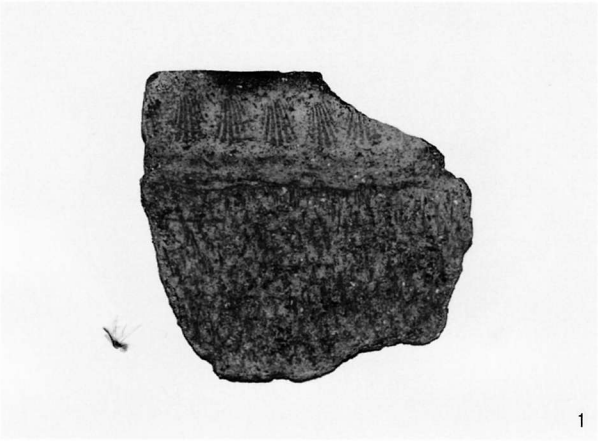
4　炉264（南から）

5　炉210～212（南東から）

6　井戸181（西から）

7　土壙392（南から）

8　土壙244（北から）


1

103

105

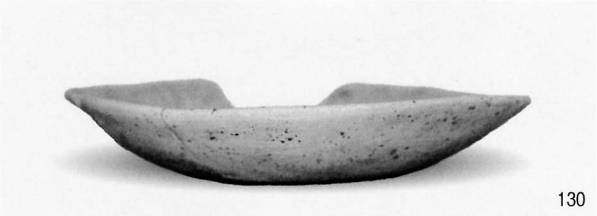
9

98

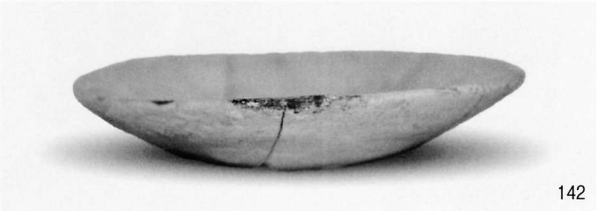
33

121

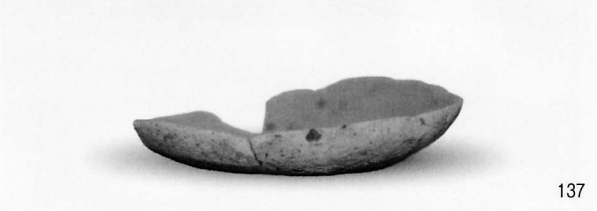
35


130

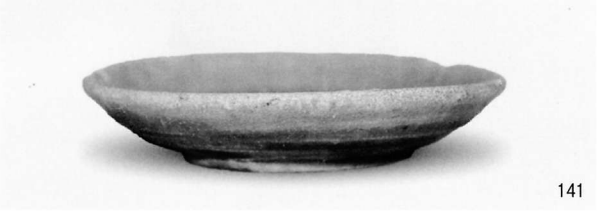
75


142

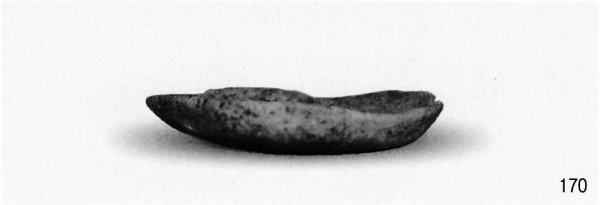
77


137

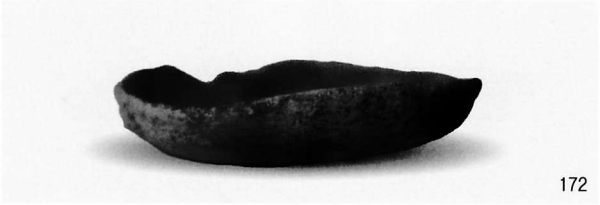
100


141

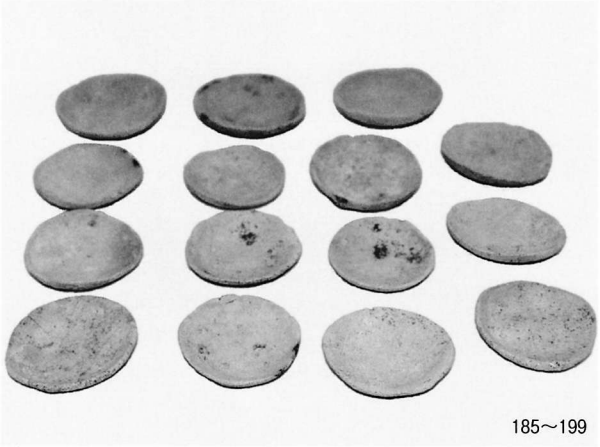
土壙438（9）・井戸166（33・35）・堀116（1・75）・堀127（77）・堀201（98・100・103・105・121）・土壙244（130）・土壙429（142）・井戸181（137・141）出土遺物


170

158

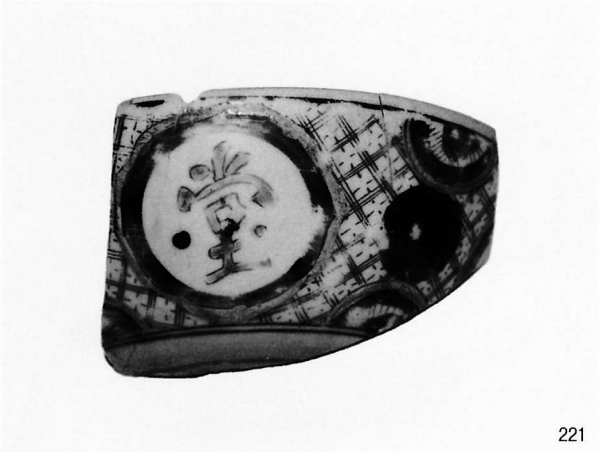

172

210


185～199

155

220


221

222

土壙45（170・172）・土壙55（185～199・210）・土壙343（158）・井戸20（155）・土壙52（220・221）・土壙73（222）出土遺物

225

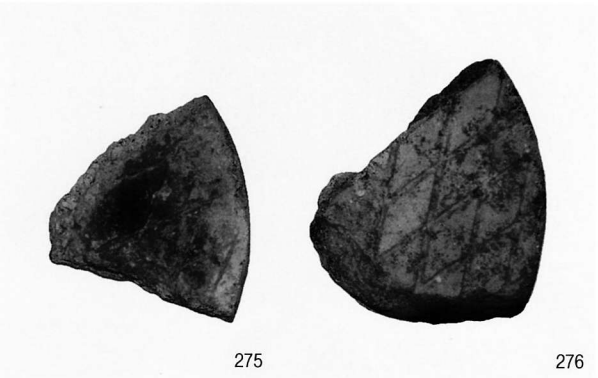
228

232

244

249

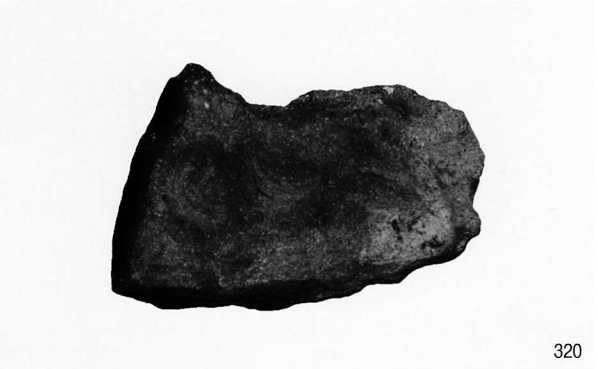
274


275　276

316

318　319

317


320

土壙11（225・228）・土壙93（232）・柱穴280（244・249）・井戸14（274）・土壙219（316）・土壙115（275）・土壙13（276）・土壙298（317）・土壙343（318～320）出土遺物

250

251

252

253

254

255

256

257

堀127（250）・整地層③（251）・土壙103（252）・整地層②（253）・土壙104（254）・堀116（255～257）
出土遺物

258

259

260

261

262

263

264

265

井戸20（258）・堀127（259）・堀116（260～265）出土遺物

266

267

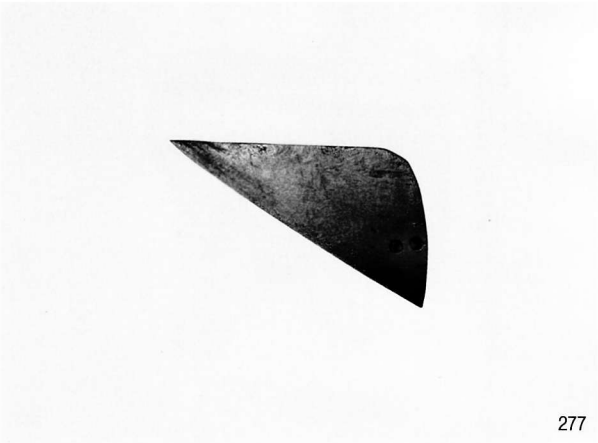
268

269

270

271

272


277

柱穴272（266）・整地層③（267・268・269）・土壙58（270・272）・土壙343（271）・井戸26（277）
出土遺物

妙 覚 寺 城 跡

―平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡―

発行日　2013年10月31日

編集
発行　古代文化調査会

住　所　〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中１丁目４番地125-1404
TEL　(078)857-6368

印　刷　真　陽　社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　(075)351-6034